

山梨県都留市小形山

中谷遺跡

都留市発掘調査報告書

都留市教育委員会

1973・3

中谷遺跡出土土偶（全長23cm）



発掘調査によせて

先に行なわれた住吉遺跡の発掘調査も大きな成果をおさめて終了することができましたが、今回は、また中谷遺跡の発掘が行なわれ、私たちの祖先の残した貴重な文化遺産がみごとにその姿を現わし、当時の人々の生活を目のあたりにする思いがいたします。

数千年もの間、地下に眠っていた住居の跡や、素朴な人間らしさをもつ土器、石器等を生活の用具として、精神のよりどころとして、自然の中で強く生きぬいてきたという実証に非常に感慨深いものがあります。

最近文化財に対する一般の関心が高くなつたことはまことによろこばしいことであり、郷土の過去の文化や祖先の生活を知るための唯一の手がかりとなる遺跡は十分な調査を加え、明らかにし、保護の手をさしのべなければなりません。都留市内には、以前から遺跡の存在が各所にみられ、縄文や弥生の文化のあったことが知られていますが、特に小形山の中谷地区には、土器片や石器が多く発見され、今回の発掘調査により、縄文後期の文化の存在が確認されたのであります。

この報告書がひろく活用され、この地の縄文文化を知る手がかりになるとともに、本市の文化財保護の向上に役立てば幸いです。

この大きな成果をおさめられた多くの関係者の協力と努力に対し厚く感謝申しあげる次第であります。

序

遠い祖先の貴重な文化遺産、これを大切に保護し、後世に伝えるのはわれわれの責任であり、使命であります。

近年文化財に対する一般の関心が深まっているなかで市では積極的に文化財保護行政にとりくんでおりますことは、まことによろこばしい次第であります。

先住民の遺跡発掘調査、旧家に伝わる古文書等の調査、衣食住、信仰、社会生活など精神的、物質的な生活を通して有形的、無形的に伝承された民俗の調査等文化財審議会委員や文化財調査員、都留文大考古学研究会員などのご協力により、着々と史料の収集と検討が加えられております。

この中で4千年あるいは5千年前という祖先の生活の跡を知る唯一の手がかりともなるべき遺跡調査は、法能の住吉遺跡調査が昭和46年7月に実施され、大きな成果を収めました。これに引きつづいて、小形山台地の一隅、中谷遺跡調査がこの程行なわれました。

すでにこの附近で、昭和39年中央自動車道建設事前調査として山梨県中央自動車道考古学調査団によって行なわれ、縄文後期と弥生時代の配石遺構が学界に発表されています。

昭和47年3月、農道拡工事の際土器と住居跡を確認したので調査会を発足、調査団長に日本考古学協会員山本寿々雄氏を委嘱し、都留文科大学考古学研究会員の手によって本格的な調査となった次第であります。

発掘された遺跡、遺物そこには数千年も前の縄文時代後期に原始狩猟生活をした生活のあとが実証されたのであります。

これら貴重な記録をここに作製し、その成果をまとめ本書を刊行した訳であります。この調査書がひろく関係者に活用されるとともに縄文文化を知る手がかりになり貴重な文化財の保護に役立つことを念じてやみません。

おわりに本書刊行までに寄せられた関係者のひとかたならぬご努力とご協力に対し、深甚なる敬意と感謝の意を表します。

昭和48年3月1日 都留市教育委員会

調査によせて

従来は主として ① 石造遺構 ② 敷石遺構 という仮名称で、組石を中心とする山梨県下の関係遺跡調査を手がけてきたところであったが、この種の配石遺構が比較的郡内地方に多いことの意義に加えて、表面採集によって ③ 小動物を有する口縁部破片（蛙）が注目されはじめ、これが一応は ④ 動物形土製品にも共通性を求めるものとして若しや配石遺構に伴なうものであるならばアニマリズムを表現していたものではなかろうかなど考へもいたところであった。

たまたま同地区を都留市の農道が広幅され、一部の配石を伴なう包含層のあることを都留市内の文化財関係者や、都留文科大学学生によって確認され、繩文後期～晩期にかける文化の中にどのように位置づけられるのか、また晩期の安行Ⅲa. b. cに伴なう東北文化の実態を明らかにし、あわせて組石を中心とする遺構が、広く日本各地の配石遺構の中でどのような意義づけができるであろうかとする両面をになって、調査するべく諸般の準備が関係者の手でおこなわれたのである。今回の発掘区域は宅地造成の可能性が明らかとなり、これが造成以前において調査することが時宜を得ているものと関係者の間で協議がおこなわれ、中谷遺跡調査会を発足出来るまでとなつたのである。（別紙参照）

限られた面積内においても常に計画的に調査が進められるよう都留市教育委員会関係者や文化財審議委員関係者によって前向きな準備がおこなわれた。

そして都留文科大学考古学研究会の諸君や卒業生OB会の諸兄と共にみのりのある記録を残すよう、関係者すべての人々が協力を誓いあつたのであった。

註

- ① 山本寿々雄 石造遺構の新例 富士国立公園博物館研究報告 4号 1960
—山梨県都留市旭の場合—
- ② 同 上 山梨県下の敷石遺構 同 上
- ③ 山本正則 都留市小形山中谷出土の
竹内清志 小動物を有する口縁部片
について 甲斐考古 9の2 1972
- ④ 江坂輝弥編 動物形土製品 日本原始美術 2 1964

目 次

序

調査によせて

例 言 ----- 1

第1章 遺跡の位置および調査の経過

 第1節 遺跡の環境 ----- 19

 第2節 発掘調査日誌 ----- 22

第2章 調査の概要

 第1節 層序と遺構 ----- 28

 第2節 遺 構 ----- 29

第3章 出土遺物

 第1節 土 器 ----- 32

 第2節 土 製 品 ----- 51

 第3節 石 製 品 ----- 56

 第4節 自然 遺 物 ----- 57

第4章 特 集

 1 出土遺物についての 2 ~ 3 の考察 --- 山本寿々雄 --- 73

 2 縄文時代の配石遺構 ----- 杉本 博久 --- 78

 3 山梨県内出土の土偶, 耳栓地名表 ----- 83. 87

例　　言

- この調査は、民家増築に伴う緊急の記録保存を、都留市当局の予算をもって、都留文科大学考古学研究会に委託され、行なわれたものである。
- この調査の主眼は、小形山台地における縄文時代後期晩期に伴う配石遺構の研究とし、安行Ⅲ a b c に伴う大洞系文化の実態を究明しようとしたものである。
- この報告書の執筆および図版作製分担は次のとおりである。

写 真 摄 影	里 村 晃 一		
遺 跡 の 環 境	奥 隆 行		
地 層	森 本 圭 一		
遺 構	酒 井 由 美 子	河 合 良 彦	渋 谷 由 美 子
遺 物	山 本 正 則	一 之 瀬 寿 美 子	田 中 文 江
	服 部 弘 栄	泉 恵 子	岡 田 由 紀 子
	斎 藤 敦 子	田 村 正 和	宮 前 孝 子
考 察	山 本 寿 々 雄 外		
図 版	山 本 正 則	小 野 淳 子	竹 内 清 志
	梅 山 朋 子	松 井 仁 美	岡 田 文 江
土 器 復 元	奥 隆 行		

- 本遺跡焼土中から出土した木炭については、都留文科大学教授・調査団顧問の條原博教授により、静岡大学に、カーボンデーターイングをお願いした。時間的な都合で、本書には間に合わなかったが、後日追加補足するものである。また、都留文科大学自然科学研究室の先生がたには、石器の石質や土壤の鑑定にお骨折いただいたことを記し、深い謝意を表する次第である。

中谷遺跡調査会規約

第1章 総 則

(目的)

第1条 この調査会は、小形山中谷地区内における埋蔵文化財包蔵地の宅地造成前の調査を施行し、その記録を作成すると共に保存活用方法を研究することを目的とする。

(名 称)

第2条 調査会の名称は、中谷遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

(事 業)

第3条 調査会は、第1条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 遺跡の予備調査、本調査による記録作成および保存活用方法の研究。
2. その他前項の目的を達するために必要な事業。

(事 務 局)

第4条 調査会の事務局は、都留市上谷270番地都留市教育委員会内におく。

第2章 組 織

(組 織)

第5条 調査会は、次に掲げる役員をもつて組織する。

顧問 1名 名誉会長 1名 会長 1名 副会長 3名

理事 若干名

（顧問、名誉会長、会長、副会長）

第6条

1. 顧問は、都留市長の職にあるものをもつてあてる。
2. 名誉会長は、都留市教育委員会教育委員長をもつてあてる。
3. 会長は、都留市教育委員会教育長の職にあるものをもつてあてる。
4. 会長は、調査会の業務を総括し、調査会を代表する。
5. 副会長は、都留市文化財審議会会长および調査団顧問並びに調査団長をもつてあてる。
6. 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

（理 事）

第7条 理事は、市内文化財保護関係者および調査団のうちから会長が委嘱する。

(役員の任期)

第8条 役員の任期は、調査会解散までとする。ただしその職ある故をもつて委嘱された者の任期は、当該職の在職期間とする。

(事務局長)

第9条 調査会に事務局長をおく。

事務局長は上司の命を受け、調査会の事務を処理し、事務員を指揮監督する。

(事務局員)

第10条 調査会に事務局員をおく。

1. 事務局員は、会長が委嘱する。

2. 事務局員は、上司の命をうけ、調査会の事務に従事する。

(調査団)

第11条 調査会に予備調査、本調査、その他の事業を専門的に実施するため、学識経験者から成る調査団をおく。

(調査団顧問、調査団長、副団長)

第12条 調査団に調査団顧問、調査団長、及び副団長をおく。

1. 調査団顧問、調査団長は、学識経験者のうちから会長が委嘱する。

2. 調査団長は、会長の命をうけ、調査団の業務を総括し、調査員を指揮、監督する。

3. 副団長は、団長が依頼し、団長事故あるときは、その職務を代行する。

(調査員)

第13条 調査団に調査員をおく。

1. 調査員は、会長が委嘱する。

2. 調査員は、上司の命をうけ、調査団の業務に従事する。

第3章 役員会

第14条 役員会は、顧問、名誉会長、会長、副会長、及び理事で構成する。

2. 役員会は、本規約に定めるものその他、調査会の事務管理及び執行に関する基本的な事項を決定する。

(招集)

第15条 役員会は、必要な都度会長が招集する。

2. 役員の3分の1以上から会議の目的である事項を示して役員会開催の請求

があつた時は、会長は役員会を招集しなければならない。

(会議の運営)

第16条 役員会は在任の役員の3分の1以上が出席しなければ開催できない。

2. 前項の場合、当該議事について書面をもつてあらかじめ意志表示し、あるいは、他の役員を代理人として表決を委任した役員は出席とみなす。
3. 会長は役員会の議長となる。
4. 役員会の議事は、特に定める場合を除き、出席役員の過半数の賛成により決定する。

第4章 事務の管理、執行

(事務の管理、執行の基準)

第17条 調査会の事務の管理及び執行に当っては、本規約並びに役員会で決定する基準にしたがって行なうものとする。

第5章 規約の変更、解散

(規約の変更)

第18条 規約の変更は役員会の議決によるものとする。

(解散)

第19条 調査会は、第3条の事業の完遂後、解散する。

付 則

本規約は、昭和47年6月29日から施行する。

中谷遺跡調査会名簿

顧問	都留市長	富山節三
名誉会長	都留市教育委員会教育委員長	高部正通
会長	都留市教育委員会教育長	定月太郎
副会長	都留市文化財審議会会长	羽田金富士男
副会長	都留文科大学教授	篠原博
副会長	中谷遺跡調査団長	山本雄
理事	都留市教育委員会教育委員	杉田寿章
々	々	高橋榮市郎
々	々	木村嘉則
々	都留市文化財審議会委員	小俣次郎
々	々	河口應彦
々	々	遠藤彦智
々	々	渡辺匡重
々	々	内藤長義
々	々	渡辺恭昇
々	々	内藤松昇
々	々	兼奥隆
々	々	中村光行
々	々	杉本太郎
々	々	本祺明
調査団顧問	都留文科大学教授	原博
調査団長	日本考古学协会会员	山本寿雄
調査団員	都留文科大学考古学研究会員	
事務局長	都留市教育委員会教育課長	大野三朗
事務局次長	課長補佐	棚本安男
事務局員	社会教育第一係長	山本典義
々	社会教育第一係	石村修

都留文科大学考古学研究会

(学年別アイウエオ順)

4年生 山本正則

3年生 一之瀬寿美子・酒井由美子・田中文江
服部弘栄

2年生 泉恵子・小野淳子・河合良彦
里村晃一・竹内清志・松井仁美

1年生 石倉英明・梅山朋子・岡田文江
岡田由起子・片山朝代・斎藤敦子
渋谷由美子・田村正和・宮前孝子

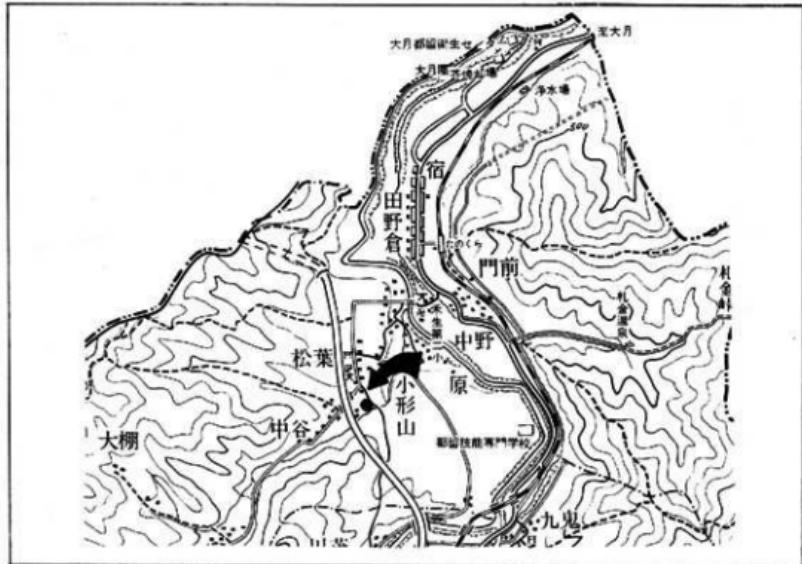
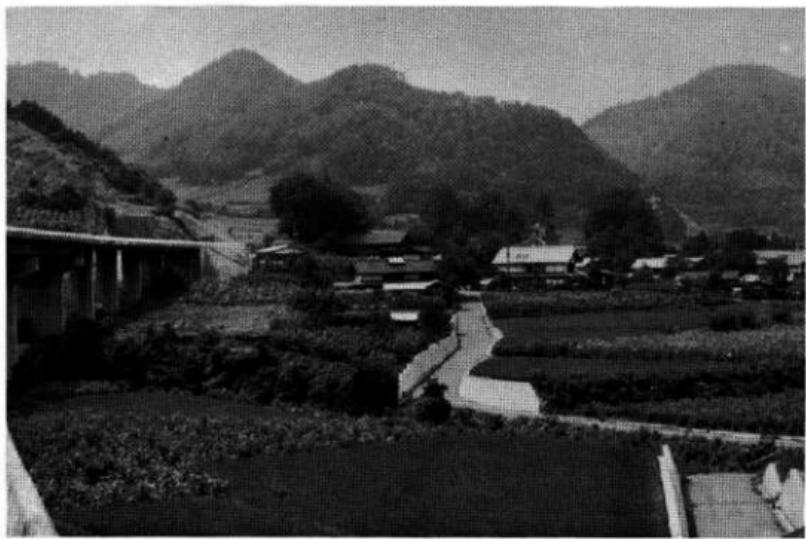
補助調査員 桂高等学校社会部

3年生 大野和男・

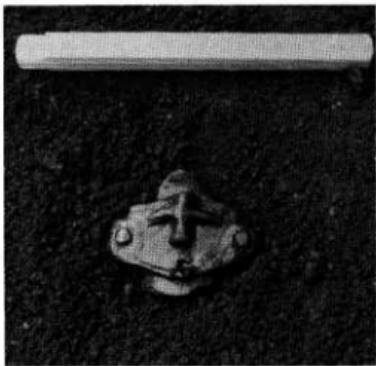
2年生 小林春美・小林由起子・藤本真理子
1年生 木暮富士子・新田章・宮下昇三
武藤尚子

都留第1中学校社会部

渡辺秀男・舟久保紳一・藤江良二
福島晃一・井上昇・今井修司
幡野忠一



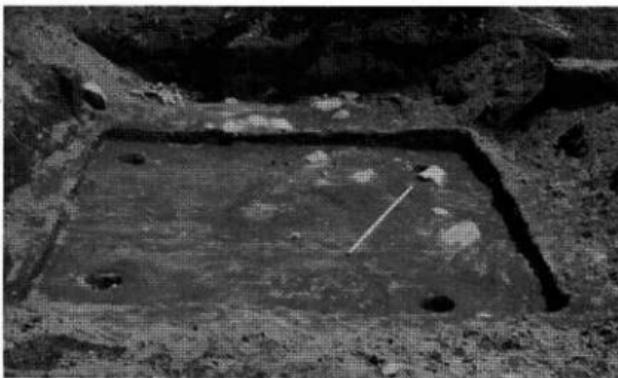
図版 I　遺跡遠望・地形図



図版Ⅱ 遺物出土状況



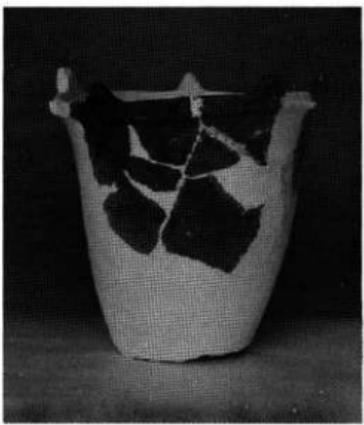
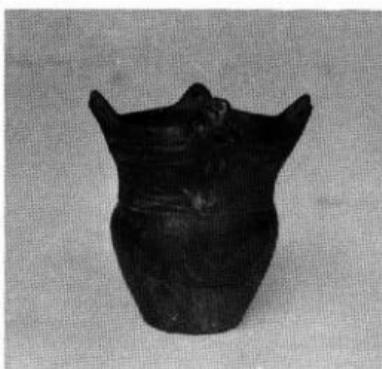
圖版III 遺物出土狀況



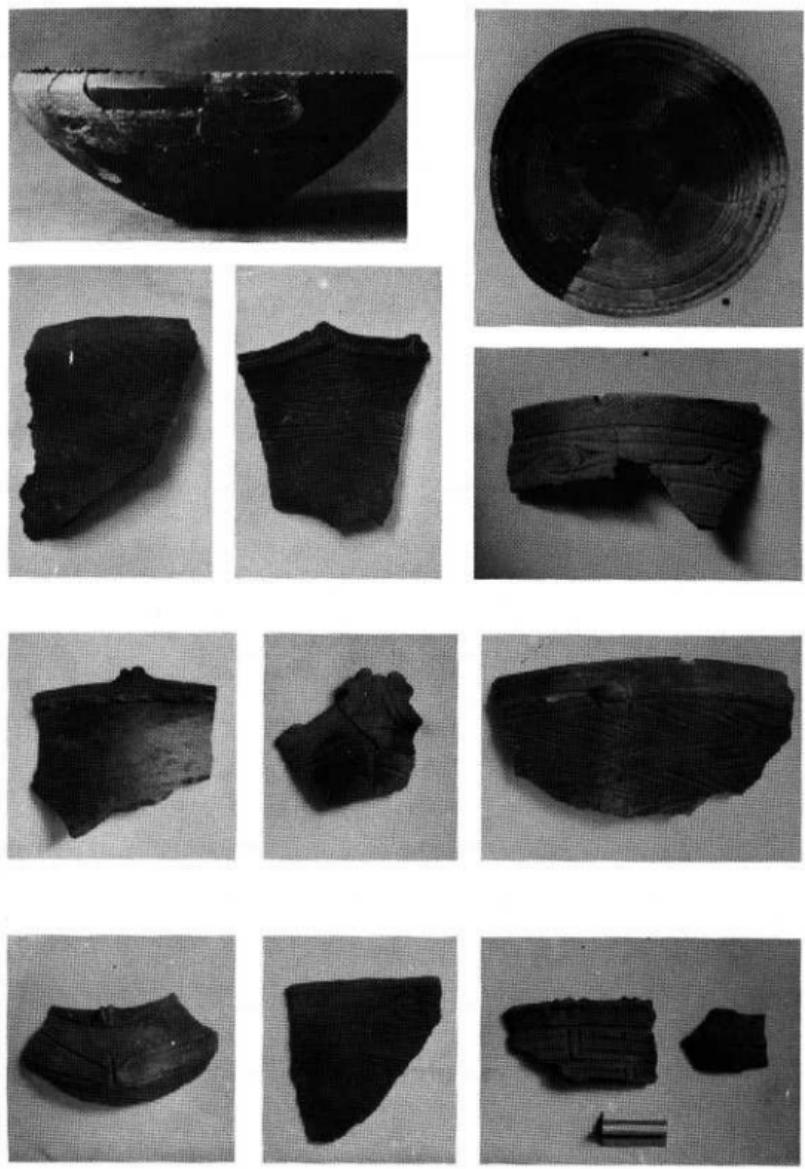
圖版IV 遺物出土狀況・住居址出土狀況



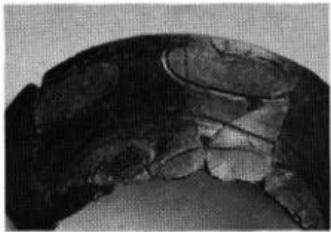
図版V 出土土器



図版VI 出土土器

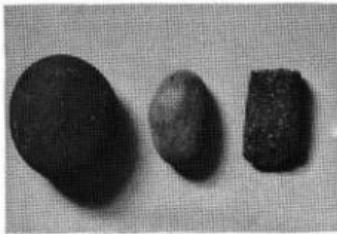
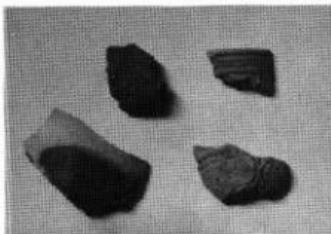


図版Ⅶ 出土土器



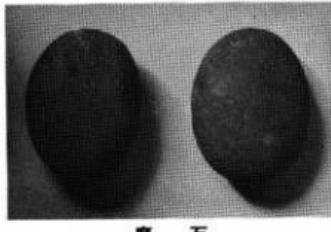
注口土器片

把 手



注口土器片

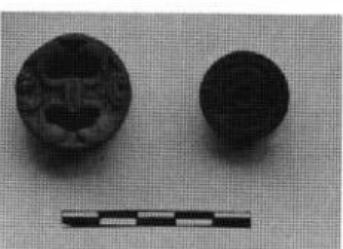
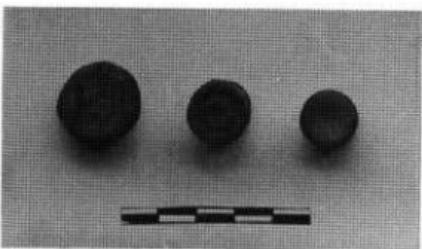
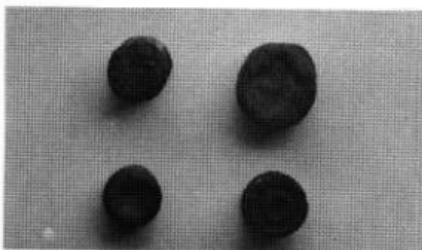
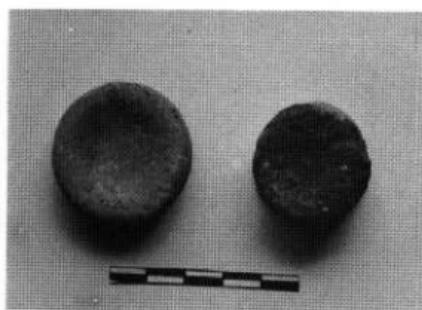
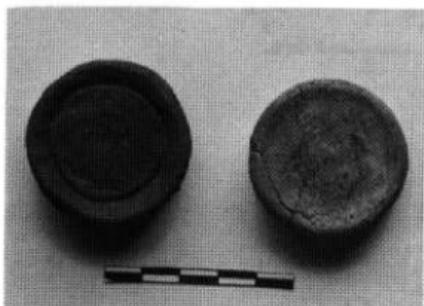
磨 石



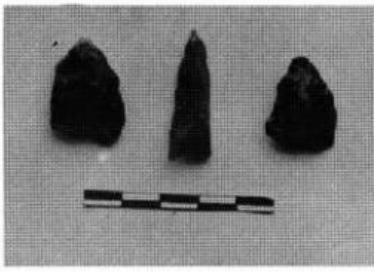
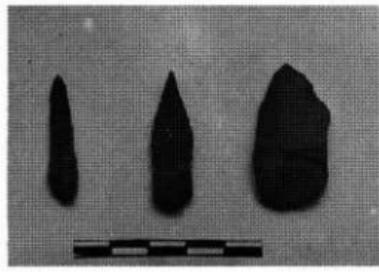
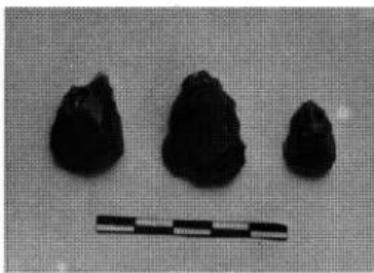
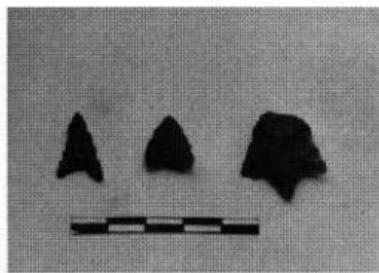
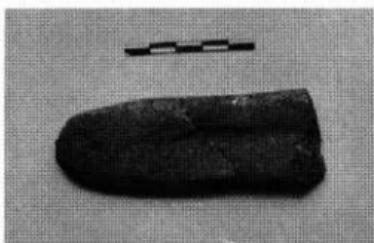
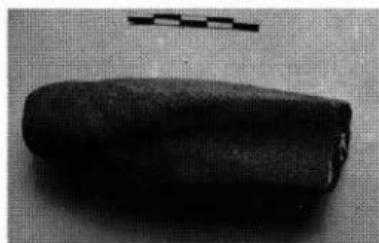
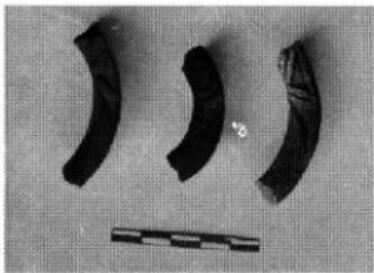
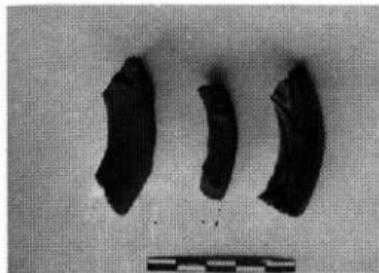
磨 石

凹 石

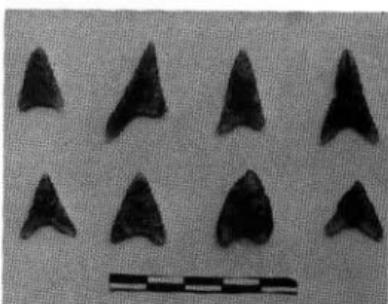
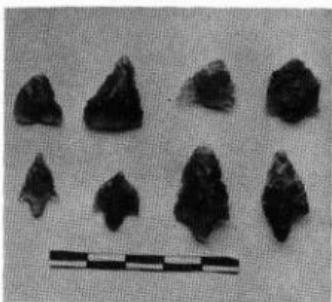
図版VII 出土土器・出土石器



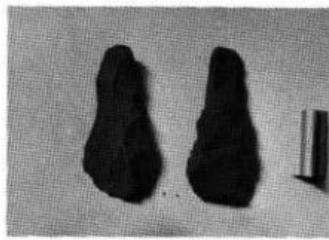
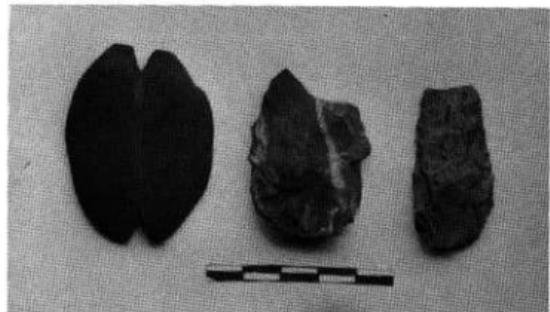
図版Ⅷ 出土耳栓



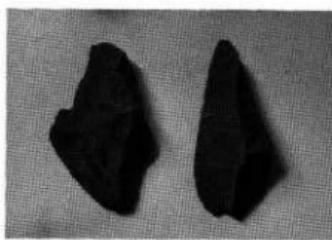
図版IX 出土耳栓・出土石器



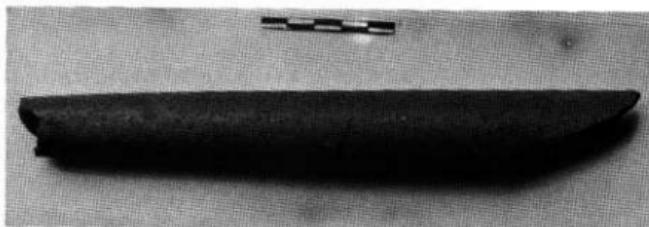
石 錐



打製石斧

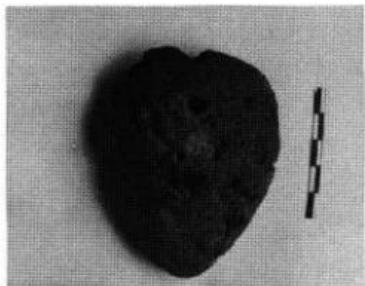


石刃樣石器



石 刀

図版X 出 土 石 器



図版 XI 出土土偶・出土玉

第1章 遺跡の位置および調査の経過

第1節 遺跡地の環境

本遺跡は、都留市小形山大原に位置する。富士急線田野倉駅から南西1km強の所である。前方は桂川左岸段丘の所謂大原台地で、後方はすぐ高川山山麓の天狗山に接している。高川山に端を発し、桂川に注ぐ高川がすぐ前方を流れ、小さな渓谷を形作っており、大原台地を一望にのぞむ地点に立地している。

地元の人は「十二天原」と称しているが、今回の発掘で我々が調査したのは「十二天原」のほぼ中心地点小形山1789番地、標高約500mの地域200平方mである。

調査の経過

中谷遺跡の存在は早くから知られて、大正年間、附近の小形小学校々庭拡張の際竪穴住居址が、又大野伝兵衛氏の畑からは敷石住居が発見されたと伝えられている。又、日向房吉氏敷地内に見られている石棒破片、磨石、住居址内出土と想われる石にて築いた小塙が、部落内に十二ヶ所あったと伝えられている。

地元の小侯良治氏が、中央道陸橋下の畑から土器片、及び美麗な大型分銅型石斧（打製石斧）、定角石斧（磨製石斧）、石刀を採取し、現在都留市で保管している。

先学仁科義男氏も、その著「甲斐の先史並びに原史時代の調査」に遺跡の存在を伝えている。

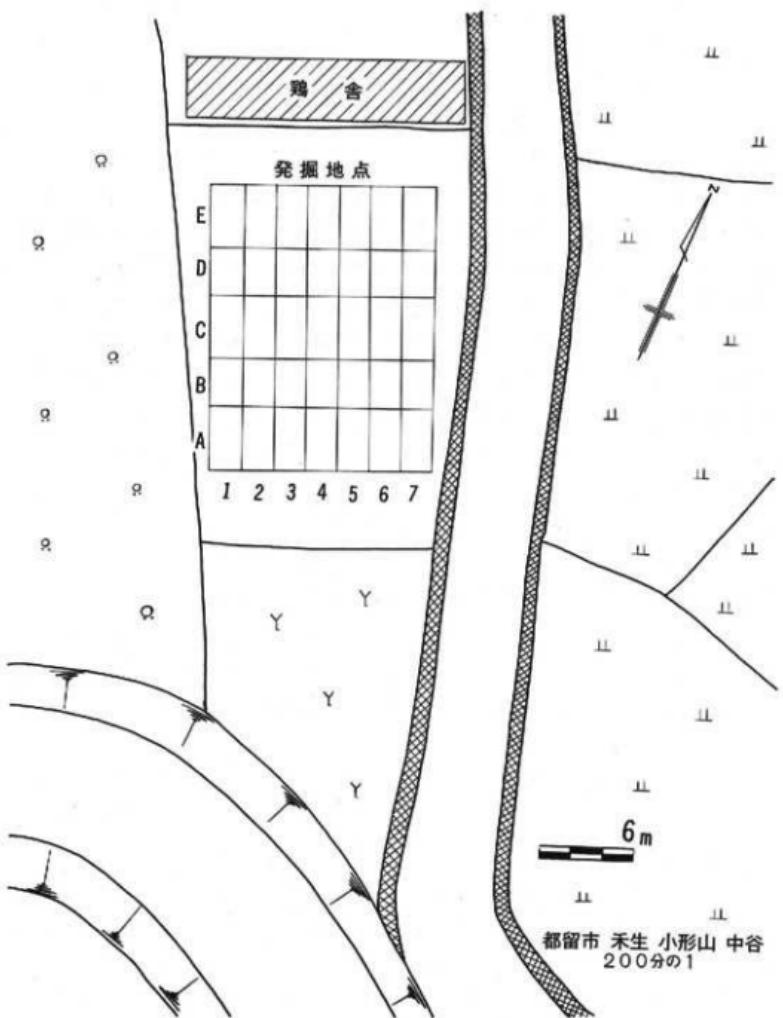
昭和39年には中央道建設事前調査として、立正大学文学部考古学研究室の手によって発掘調査が行われ、縄文、弥生両時代にわたる配石遺構の発見が報告されている。（中央自動車道大月-富士吉田地内の道路敷地内の報告）

昭和46年12月18日の調査で、珍らしい獸面把手が採取され、附近から石棒、石皿の破片および磨石と思われる石器類が多数発見された。

昭和47年3月農道拡幅工事のため、今回発掘地点の東端を2m×50m程削取された際、多量の土器片と住居址2（内1ヶは敷石住居）が確認され、採集された土器片から4ヶの復元可能土器を得、その他小型磨製石斧（定角石斧）1、石鏟、注口破片等を得たので、取り敢えず附近を実地測量し、県教委に報告、将来の発掘に備えていた処、道路拡幅工事により、自動車の通行が可能となつたため、敷地所有者が現状を変更の予定の由伝聞したので、市教育委員会は、都留文科大学考

古学研究会に調査を委嘱、県教育委員会の応援を得て発掘調査を行うに至ったものである。

山梨県遺跡調査団幹事 奥 隆 行
都留市文化財審議会委員



第1図 グリッド設定図

第2節 発掘調査日誌

昭和47年7月8日 土曜日 雲

午前9時より午後4時30分まで各調査員の荷物を宿舎に運び、宿舎の整理を始める。発掘の現地では、午後5時30分よりグリッドを設定した。午後9時からミーティングを始め、明日からの発掘に備えて綿密な計画をたてる。

A-1, A-3, A-5, A-7をA班、C-1, C-3, C-5, C-7をC班、E-1, E-3, E-5, E-7をE班と命名し、A班には、山本正則、酒井由美子、泉恵子、岡田文江、斎藤敦子、渋谷由美子、田村正和、B班には、一之瀬寿美子、服部弘栄、河合良彦、竹内清志、松井仁美、梅山朋子、片山朝代、宮前孝子、C班には、田中文江、小野淳子、里村晃一、石倉英明、岡田由紀子をあてた。

7月9日 日曜日 雲

午前8時から結団式を行なう。教育長などの挨拶があり、8時40分より作業を開始する。12時30分頃から雨が降り始めたので作業を中止した。A-5グリッドは立木が中央にあり発掘困難のため放置しておく。A-7グリッドは、都留市産業課の指示により、グリッドの変更をやむなくした。A-3グリッドから石器土器が多数出土。A-1グリッドは-25cm、A-3グリッドは-38cm、A-7グリッドは-25cm本日中に掘り下げる。C-1グリッドは、排土の都合のため発掘を遅らせ、C-3グリッドは、-40cm掘り下げたが搅乱がひどく遺物は少なかった。

C-5グリッドは、-42cm掘り下げたところで黒色土になった。意外に搅乱をうけていない。表土から-42cmのところから、復元可能と思われる土器片のかたまりが出土した。C-7グリッドからは、石鏸、石斧が出土、深さ-43cmまで土を排除。E-1グリッドは未掘。E-3グリッドは-35cm、E-5グリッドは-40cm、E-7グリッドは-36cm掘り下げた。

各グリッド共いまだ搅乱層なので注目すべき遺物はない。 E-3

グリッドから土器片多数出土。E-7グリッドからは、石錐が数点出土。なお、午前9時から、第2回調査会会合を行ない午後3時からは、山本寿々雄氏を囲んで、調査団のミーティングを行なった。

7月10日 月曜日 雲

午前8時から作業を開始する。A-1グリッドより-30cmで蔽石、-40cmで大洞C式と思われる浅鉢の大きなかけらが出土。また、同じレベルより、子供の握りこぶし大の黒耀石核が出土。-48cmまで掘り下げる。A-7グリッドは、昨日のまま掘らず。C-3グリッドは、-48cmまで掘り下げる。C-5グリッドは、表土より-43cmで黒色土層に入った。昨日出土した石器のまわりから打製石斧などの石器が多数出土。なお、昨日の1個体分の土器のかたまりを写真撮影。-47cmからヒスイ製の玉が出土。土器の出土は、グリッド中最高。C-7グリッドは-40cmまで掘り下げる。E-1グリッドは、-46cmで住居址の床面が現われる。床面以外攪乱されているので遺物はきわめて少ない。石錐2点、打製石斧1点出土。出土遺物からこの住居址は、古墳時代のころの物と思われる。E-3グリッドは、-35cm、E-5グリッドは、-45cmまで掘り下げる。E-7グリッドは、昨日のままである。12時ごろから雨が降り始めたので作業を中止。作業が大幅に遅れそうである。全員宿舎に帰って土器洗いで1日過ごす。

7月11日 火曜日 雨

午前中雨のため午後1時より作業開始。A-1グリッドがA-3グリッドより遅れていたので同じ深さに落とす。A-1グリッドは、-50cmまで掘り下げるところで、打製石斧、大洞C式と思われる大きな土器片が出土した。復元可能。また磨石とともに黒耀石核と、それから剥ぎ取られたと思われる剝片が9個かたまって出土した。そのほか、石刀(先端と柄が欠損)石匙、分銅型石斧などが出土地した。A-1グリッドは、-60cm、A-3グリッドは、-70cm掘り下げる。C-3グリッドから土器片多数出土。C-5グリッドからは、-50cmから-55cmの間に土器片多量、耳栓や打製石斧も数点出土。C-7グリッドからは、特に目立った遺物なし。E-1グリッドからは、床面に多数の土師器、須恵器、磨石を採集。E-5グリッドからは、-44cmのところから土器片や石錐が多数出土。E-7は放置。A-C-E各グリッドは、ほとんど黒色土層にまで至り、攪乱が黒色土層にまで及んでいることを各班確認した。

7月12日 水曜日 雨

午前中雨のため、11時30分より作業開始。A-1グリッドの深さまで、B-1・B-2・A-3の各グリッドを掘り下げる。A-3グリッドより打製石斧、鹿角を採取し、黒色土の落ちこみを発見。A-3グリッドは、-48cm B-1グリッドは、-33cm、B-2グリッドは、-42cm、A-2グリッドは、-43cmまで掘り下げる。C-2グリッドは、黒色土まで落とし切れなかった。C-3グリッドは、住居址に近いらしく、遺物の量多大のため、移植ゴテで慎重に掘り進む。打製石斧、石匙、磨石などとともに土器片多数出土。C-4グリッドは、-42cmまで掘り進んだが搅乱が多大。C-4グリッドからは、石鏃、復元可能大の浅鉢片出土。遺物の量多大。E-2グリッドを-40cmまで掘り下げる。E-7グリッドで、配石を発見。午後9時からのミーティングで、配石のレベルで各グリッドとも掘り進むことを確認。

7月13日 木曜日 晴

午前9時より作業開始。B-3グリッドを設けて掘り下げる。A-1グリッドより耳栓、B-1グリッドより磨石、B-2グリッドより磨石、くぼみ石、石鏃、石皿、土偶片、石錐などが出土。C-5グリッドから石鏃、耳栓、石斧が出土。C-7グリッドは放置。D-4グリッドを掘り始める。打製石斧出土。E-2グリッドは、-60cmまで掘り下げる。石鏃、打製石斧出土。E-1グリッドとE-2グリッド間のセクションベルトをはずす。

7月14日 金曜日 晴

午前9時20分より作業開始。B-1グリッドから、完型の土器出土。文様なし。C-5グリッドから、くぼみ石、石鏃、磨石、が出土。C班は、Cグリッドの平板測量にはいる。

7月15日 土曜日 豪雨

台風6号の影響で作業出来ず。

7月16日 日曜日 雲

本日から班編成を解散し、各グリッドを集中的に調査する。C-1・C-2・C-4・C-6・B-4・B-5・B-6・D-5・D-6を各々配石のレベルまで掘り下げる。D-6グリッドから、完形土器が、土圧で押しつぶされた形で出土。D-5グリッドから、石鏃、磨石、打製石斧、B-5グリッドからは、土偶の頭部がそれぞれ出土。

7月17日 月曜日 雨

C-5グリッドの配石を平板測量し、A-1・B-2・B-3・A-2の各グリッドを掘り下げる。A-3グリッドから定角石器、軽石製品が、A-5グリッドから土器片のかたまりが出土。また、各グリッド黒曜石製石器が多数出土。都留市教育委員5名現地視察に見える。

7月18日 火曜日 晴

C-5グリッドの配石を平板測量した後、配石の下を掘り進む。配石下より長径5m、短径3mの焼土の橢円の広がりを発見。焼土中より、炭化物、土器片、石器、骨片などが多数出土。A-1・B-1・B-2・A-2・B-3各グリッドの配石を平板測量。またそれらのグリッドから、耳栓2、土器片のかたまり3、完形土器1、土偶の腕の部分と足の部分、磨石、打製石斧、くぼみ石、石器などが出土。

7月19日 水曜日 晴

午前9時30分より作業開始。B-4・C-4・C-5・C-6の各グリッドを焼土面まで掘り下げる。B-7グリッドから完形土器出土。A-3・B-3グリッドの配石を平板測量。立正大学大学院生、小林広和氏がみえ、遺跡について話合う。

7月20日 木曜日 晴

午前9時30分より作業開始。C-5グリッドを中心とした各グリッドを掘り下げる。焼土を残し、周囲の黒色土を掘り進める。焼土中の遺物のポイントを平板におとす。C-1・C-2グリッドの配石を平板測量。A-3グリッドの火山灰層を掘り下げる。A-3グリッドより敷石住居址発見。炉址のまわりのみ敷石。立ち上がりを追う。A-4グリッドにも敷石がかかっているので、A-4グリッドを掘り下げる。定角石器出土。表土より-80cmのレベルで広げる。炉址の大きさは、南北に67cm、東西に62cmの方形で、敷石の範囲は、長径135cm、短径95cmの橢円形である。武藏野郷土館主事吉田格氏の来訪をうける。

7月21日 金曜日 晴

午前9時より作業開始。C-5グリッドを中心とした配石の下の焼土下から敷石を発見。上層の配石に使ったためか、敷石が相当破壊されている。焼土下に火山灰層が現われる。敷石を平板測量し、微細図をとる。Eのグリッドは配

石下より耳栓3、磨石2、石鏃6、定角石器1、打製石斧1出土。

7月22日 土曜日 雨

雨のため午前10時より作業開始。11時に雨のため中止。午後1時30分に山本寿々雄氏と共に雨の中を現地におもむき、配石と敷石住居に関する問題を追求。國學院大学生が来訪。UHFテレビ山梨が取材に来る。

7月23日 日曜日 雨

雨で作業がほとんど出来ず。C-2で黒墨石が48個かたまって出土。

7月24日 月曜日 雨

宿舎をひきはらい、明日から通いで発掘調査を行うことになった。作業はなし。

7月25日 火曜日 晴

今日から各調査員は、通いで行うため、午前10時作業開始。午前中埋め戻しやグリッドの中の水汲みなどの作業を行う。ぬかるみのため、配石には手がつけられず。午後1時より作業開始。B-2グリッドから両腕を欠いた土偶が出土。上半身に朱塗。南に頭を向け、顔は西に向く。土偶とその周囲の石組みを微細図に取る。

7月26日 水曜日 雲

午前9時30分作業開始。A-1グリッド石組みの微細図をとる。C-5グリッドより玉と磨製石斧出土。午後に朝日新聞社の取材をうける。

7月27日 木曜日 雲

午前9時30分作業開始。Aグリッド出土遺物を平板に記入。A-3・A-4グリッドのセクションを方眼紙にとる。C-5を中心とする焼土群を振り下げる。A-5・B-6グリッドの配石を微細図にとる。焼土群下に住居址を発見。柱穴4個確認。立ちあがり約20cm、中央に炉址らしき焼土あり、炉址に石甌ないし。上層に存在する敷石住居址又は配石に使うために抜き取られたのかもしれない。D-5グリッドより耳栓2、玉1、A-3グリッドより耳栓1、石鏃1、B-2グリッドより土偶の足1が出土。

7月28日 金曜日 晴

午前10時作業開始。昨日発見された住居址の平板測量。埋め戻し作業。

7月29日 土曜日 晴

地元の人々の協力により埋め戻し終了。

7月30日 日曜日 雨

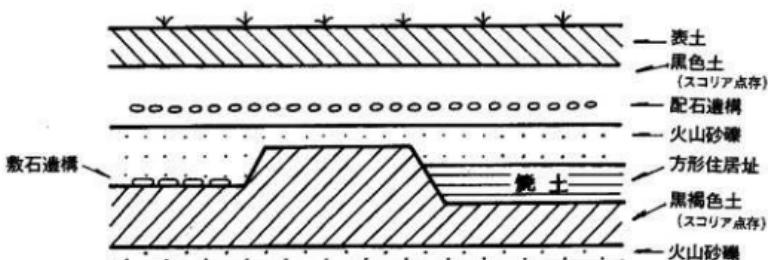
休み

7月31日 月曜日 晴

現地の機材のかたづけを午前中に行い、発掘はすべて終了。 (竹内清志)

第2章 調査の概要

第1節 層序と遺構



第2図 層位 模式図

本遺跡は、富士火山活動の影響による層が見られ、この事においては近辺の遺跡と変わらない。第2図は、本遺跡における層位の模式図で、まず遺構との関連では、配石遺構が黒色土（スコリア点存）層中で、敷石及び方形住居址が黒褐色土（スコリア点存）層を掘り込んで造られ、敷石の上に火山砂礫が約15cm、方形住居址の上に焼土が5～15cm、その上に火山砂礫が約1cm堆積していた。

各層から出土した遺物の時代は、黒色土層、上部は、安行Ⅲ b, c式相当、黒色土層中部は、安行Ⅲ a式相当、砂礫層下部1層は、安行Ⅰ・Ⅱ式相当、敷石、方形住居址からは、加曾利B式相当、黒褐色土層の下の火山砂礫からは、加曾利E式相当の土器が出土した。

中谷遺跡において見い出された各層は、火山活動による堆積と考えられるが、この附近での火山は、富士山しかなく、おそらくこれらの各層は、富士火山活動によるものと考えられる。黒色土及び黒褐色土にはスコリアを含み、火山砂礫は見ただけで明らかである。これは、富士山が常時活動していたことを表わ

している。このうち、縄文時代についての火山砂礫は、今までに都留市住吉遺跡同市美通遺跡において加曾利EⅢ式に相当する時期の物が確認されているが、このことは、中谷遺跡においても、下部の火山砂礫層が前述した遺跡の火山砂礫と同じ時期のものであることを確認した。次に敷石遺構及び方形住居址の直上にあった火山砂礫層は、他の面で、ほとんど見当らなかつたが、敷石の上に5~15cm、方形住居址の上部に1cm堆積していたことは、一度下降した火山砂礫がある程度二次堆積したことを意味しているが、富士火山活動による火山砂礫の降下した時期は、方形住居址が使用されなくなった後敷石遺構の使用中又は、使用されなくなった後で、時代としては、縄文時代後期から晩期（加曾利B~安行Ⅲa）式に相当する時期である。

今回の発掘調査において安行Ⅲa式相当の時期に、火山砂礫を伴なう富士火山活動が有ったことを確認したが、今後富士山周辺を発掘調査する事により、新しく富士山の火山活動と遺跡との関係、つまり、活動時期を明らかにすることが出来るように、遺跡発掘の上で注意する必要を認めた。

山梨県遺跡調査班幹事 森本圭一

第2節 遺構

中谷遺跡の発掘調査において、我々が確認できたのは、表土下黒色土層中に配石遺構が、又黒褐色土層を掘り込んで、敷石及び方形住居址が出土したことである。

配石遺構

表土下約50~70cmのところに、約10~20cm大の石の配列を認めた。そして、石は北から南の方向へ開いていくような形で配列しており、土器片の出土は石の分布状態に比例していた。また、第3図のような磨石と思われるものが、石のわくをほどこした石皿の上におかれた状態で出土したことや、配石遺構内からの土偶部片の出土が多く、後述するが、特に河原石が橢円形状に配置された石組みの中央部から、頭部を南に、また、顔面を上にし、やや斜めの状態で、両腕の欠損した土偶が出土したことは、配石遺構というものの性格の一端をうかがい知らせるものであろうと考える。

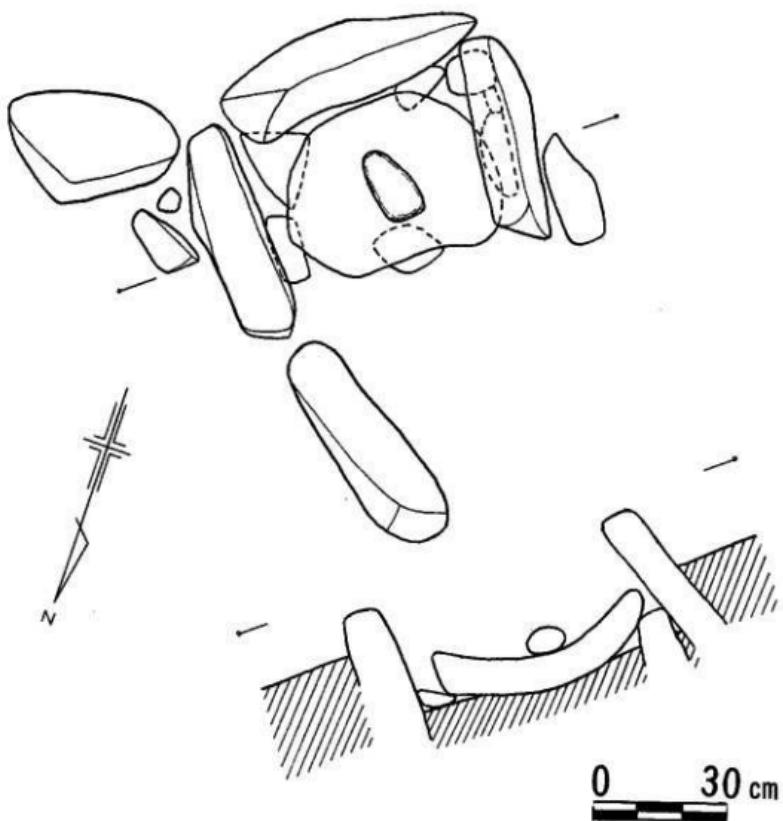
敷石遺構

表土下75cmのところに、中央に炉址のある敷石が見つかった。炉は、直径40cmあり、その周辺にだけ石を敷きつめてある。敷石は、炉の中心から半径

約50cmの円形状の拡がりをもっていた。炉の中には、焼土の堆積が約20cm認められ、焼土中には動物の骨片が少量含まれていた。また焼土の下層には、粘土状の灰の堆積が認められた。

住居址

表土下約85cmのところ（敷石と同じ層位）から、厚さ約15cm内外の焼土におおわれた住居址が出土した。住居址は、黒色土中に構築されたもので、上部の焼土が住居址発見の手がかりとなった。大きさは、北西4m70cm×北東4m60cmの方形プランであり、立ち上がりは約20cm確認できた。そして、住居址中央よりやや南よりに、南北の方向に直径1m、東西の方向に短径70cmの焼土が確認された。これは石囲いのない炉であろうと見なされる。焼土は、床面から約15cm落ちこんでいる。そして、焼土中からは、獸骨の破片、鹿の角そして、木炭が多量に出土し、その中でも、住居址の柱として使用されたのではないかと思われる直径約20cmで、長さ約2m又は約60cmの木炭が出土し、その木炭は、都留文科大学自然科学教室の條原博教授（植物学）によって、もみ又はつがの木であると確認されたことは注目される。方形プランの四隅からは、それぞれ直径30cmの大柱穴が確認された。また、この住居址の南西にある石組みは、敷石と何らかの関係があるのではないかと思われる。



第3図 配石造構の一部拡大図

第3章 出土遺物

第1節 土器

今回の中谷遺跡発掘調査では、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が多数検出されたが、その多くは、表土からのものであり、一部には、工字文を持つもの（第1類）も発見されている。したがって、縄文時代の終末期のものもあり、これらの土器の説明によって、この時期の様相の一端がうかがえよう。

第4.5.6図 実測土器解説

質	色	文様など	出土地点
A 粗製	黒褐色	口縁附近に、二条の隆起文を有する。	配石遺構
B 粗製	褐～黒褐色	無文	配石遺構
C 粗製	褐色	無文 底部に網代を有する。	方形住居址焼土中
D 粗製	褐色	無文	配石遺構
E 粗製	黒褐色	無文 口縁附近に穴が一つ有り、口縁内側に一条の沈線を有する。	配石遺構
F 粗製	黒褐色	無文 口縁内側に二条の沈線を有する。	配石遺構
G 粗褐	褐色	沈線による変形した入組文を有し、口縁部には5つの把手を有する。	配石遺構
H 精製	黒～黒褐色	二条の磨消織文帯を有し、口縁部に2対の把手を有する。	配石遺構
I 精製	黒～黒褐色	口縁部に、はりこぶ裝飾が認められ、いわゆる亀ヶ岡系の文様を有する。	配石遺構 土部
J 粗製	黒褐色	口縁附近に4つのこぶを有し、へらによる斜線で文様を形成している。	配石遺構 直下
K 粗製	褐色	無文	配石遺構

I. 第2層の土器

即ち、第2類と第3類がこれにあたる。第2類の4・6は、いわゆる雷文と呼ばれるものであり、この文様を持つ土器の器形としては、深鉢が多い。第2類は、安行III Cに比定される。

第3類の9は、亀ヶ岡式の系統をひくものと思われる。焼成は良好で、光沢があり、色は黒褐色を呈する。12も一応9と同じ系統であるが、色は黄褐色を呈する。20は、いわゆる羊齒状文の典型的なものであり、典型的なものは、この土器片だけである。19と21は、同一個体であると思われる。その他の土器片は、ほとんど粗製土器であり、光沢もある。器厚は、12・20・21は薄く、2~4mm、その他はだいたい5~8mmである。第3類は、安行III bに比定される。

II. 配石遺構出土の土器

配石遺構は、黒色土中（第2層）の下部に位置し、出土した土器は第4類である。ほとんどすべてのものが入組文であり、大形の土器が多い。また、大形の土器片の口縁部分に朱が塗ってあるものが目につく。器形は、深鉢・浅鉢・わん形・台付土器などが目立っている。すべて焼成は良く、褐色又は黒褐色を呈する。第4類は、安行III aに比定される。

III. 配石遺構下出土の土器

これらの土器は、配石遺構下から発見されたものである。第5類の49は、入組文の変形としてとらえたが、第4類に入るかも知れない。第5類は、安行IIに比定される。第6類の土器片は、53を除いては厚く、粗製の土器片が多い。ほとんどが黄褐色を呈する。

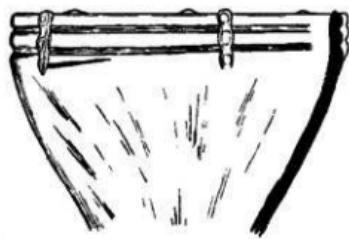
IV. 敷石面出土の土器

第7類がこれに相当する。完形品どころか、大きな土器片の出土も無かつた。58のような磨消繩文を用いてあるものが多かった。配石遺構出土の土器より厚く、光沢のある物も少ない。この遺構は、加曾利B期に相当するものと思われる。

V. 烧土中および方形住居址出土の土器

第8類がこれに相当する。土器の文様は、だいたいにおいて第7類に似ている。出土遺物の過半数が、磨消繩文である。土器は厚く、大形を呈するものが多い。

この住居址も、上記の敷石遺構と同期のものであると思われる。



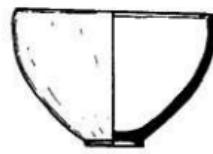
A



B



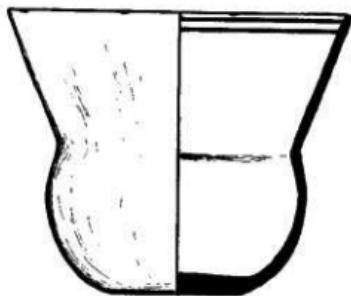
C



D



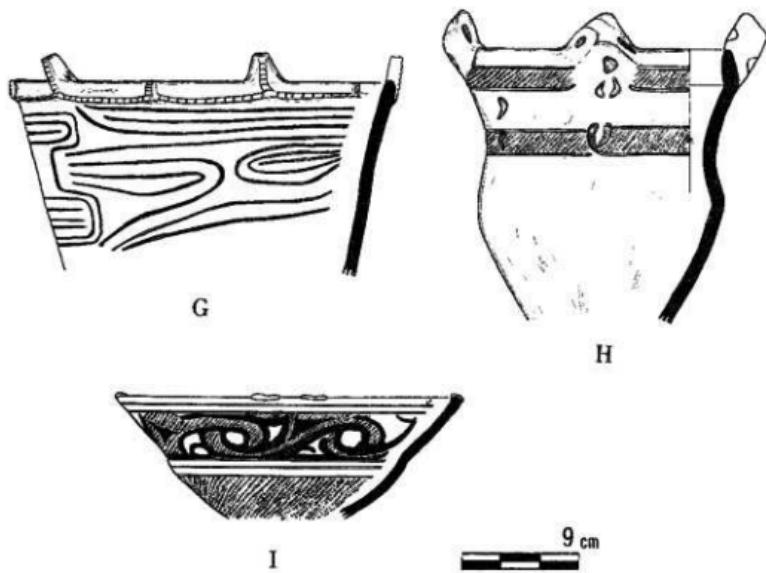
E



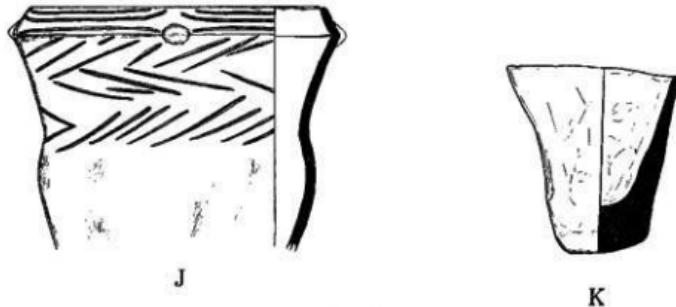
F



第4図 土器実測図(1)



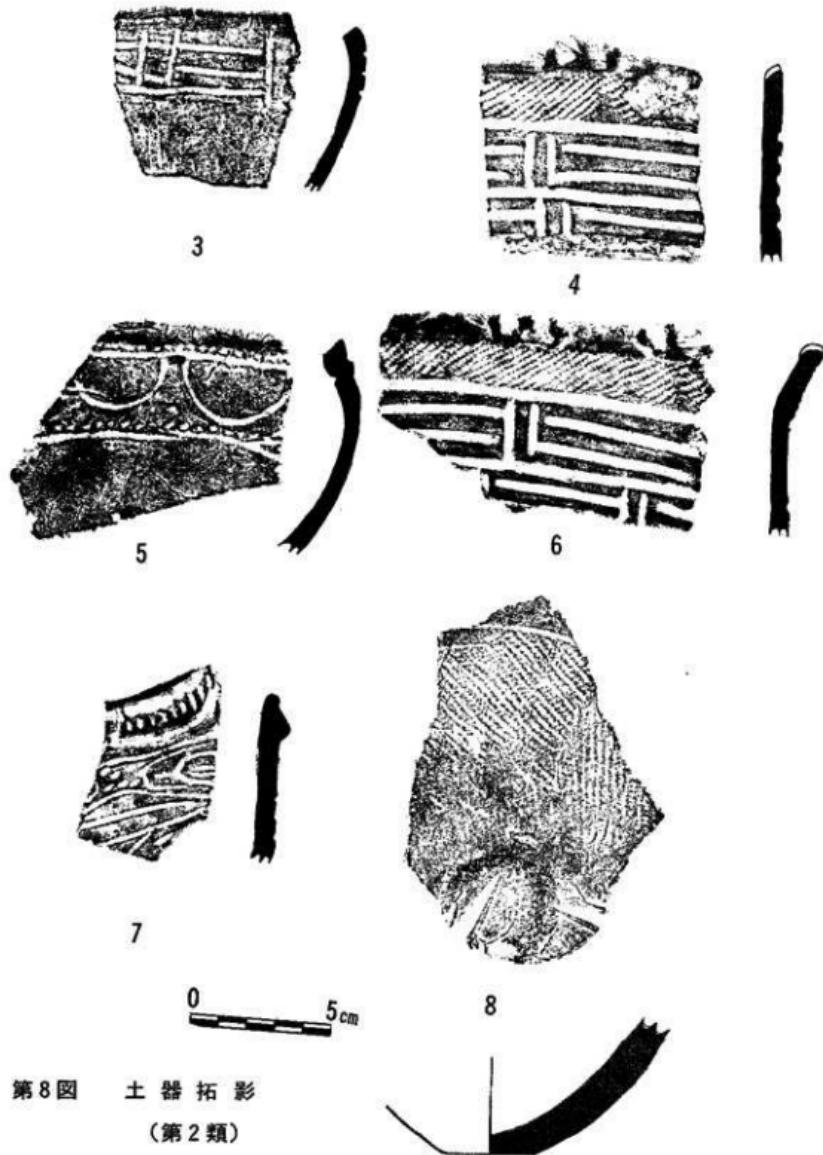
第5図 土器実測図(2)



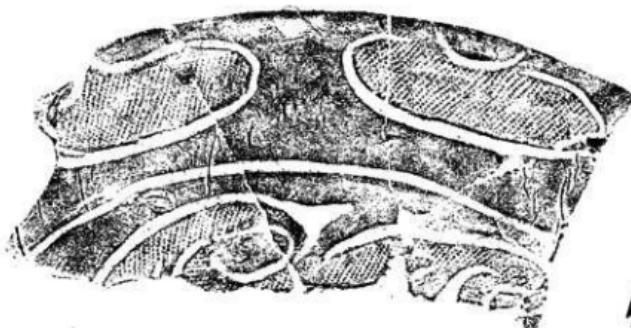
第6図 土器実測図(3) 左、(16)
右、(17)



第7図 土器拓影 (第1類)



第8図 土器拓影
(第2類)



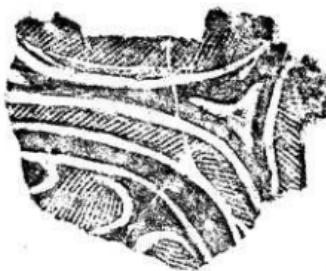
9



10



11



12



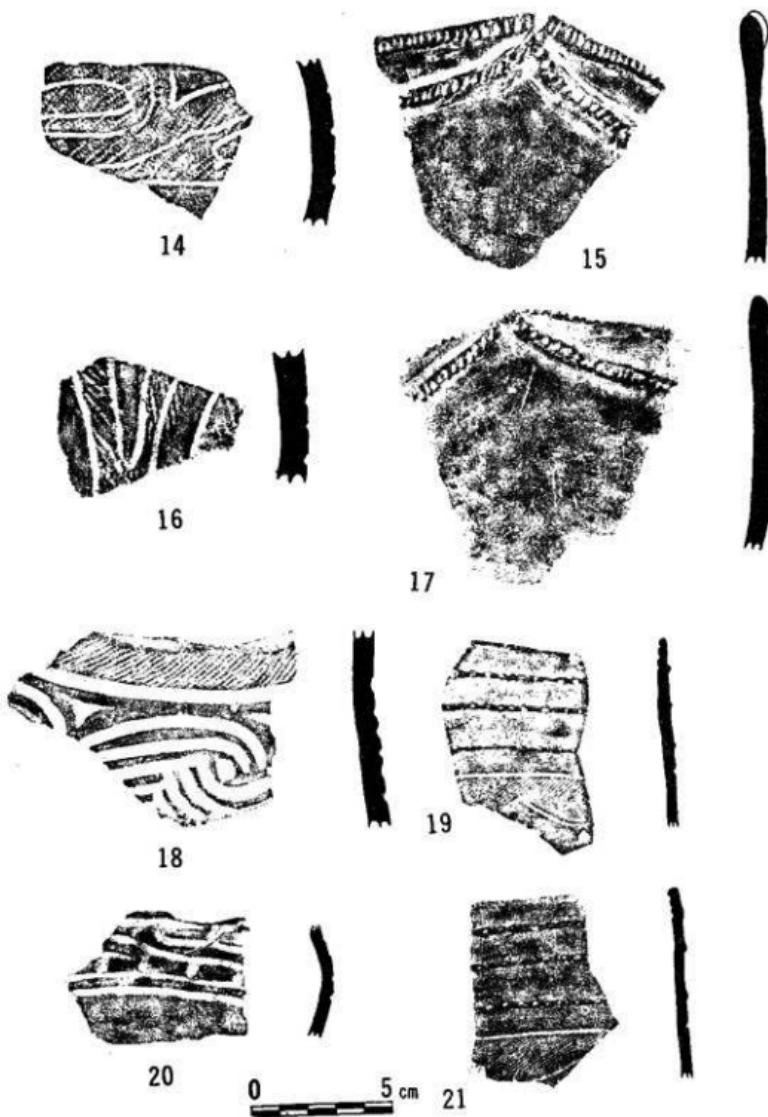
13



第9図 土器拓影

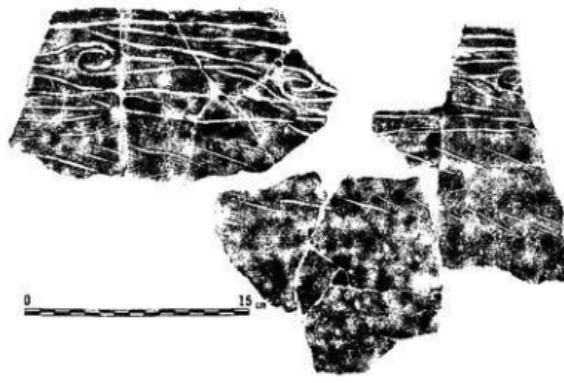
(第3類)

0 5 cm

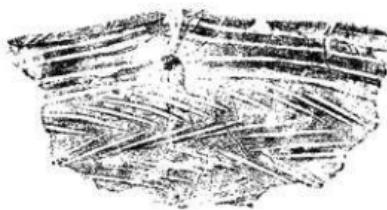


第10図 土器拓影

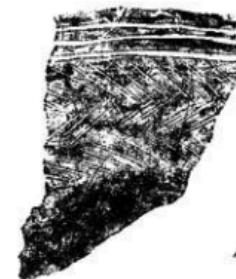
(第3類)



22



25



23



26



27

第11図 土器 拓影
(第4類)

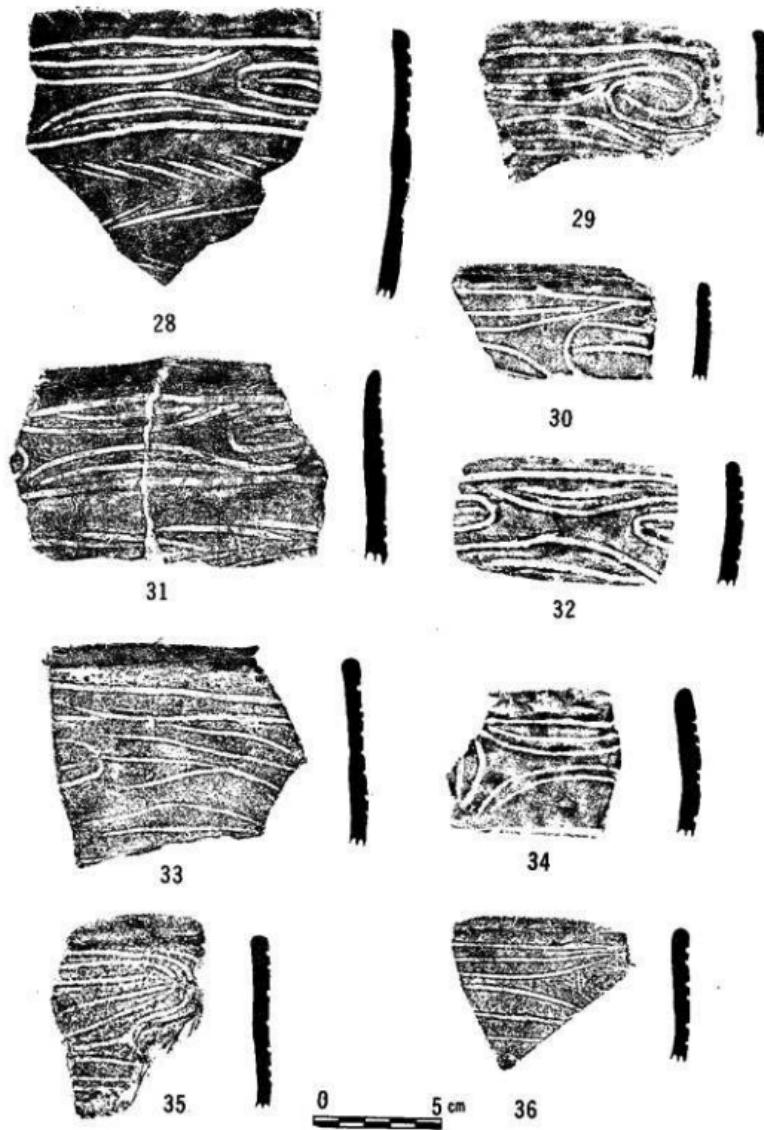
-- 40 --



24

0

15cm



第12図 土器拓影

(第4類)



37



38



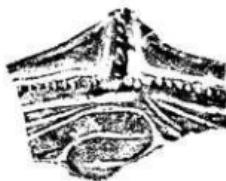
39



40



41



42



43



44



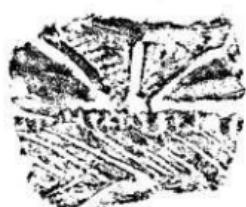
45



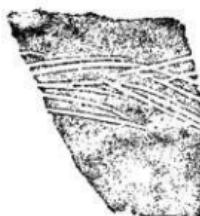
46

第13図 土器拓影

(第4類)



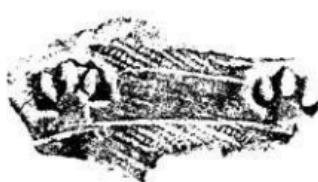
47



48



49



50



51



52



0 5 cm

第14図 土器拓影
(第5類)



53



54



55



56



57

A scale bar indicating 5 cm.

第15図 土器拓影
(第6類)



58



59



60



61



62

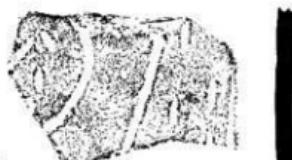


63



64

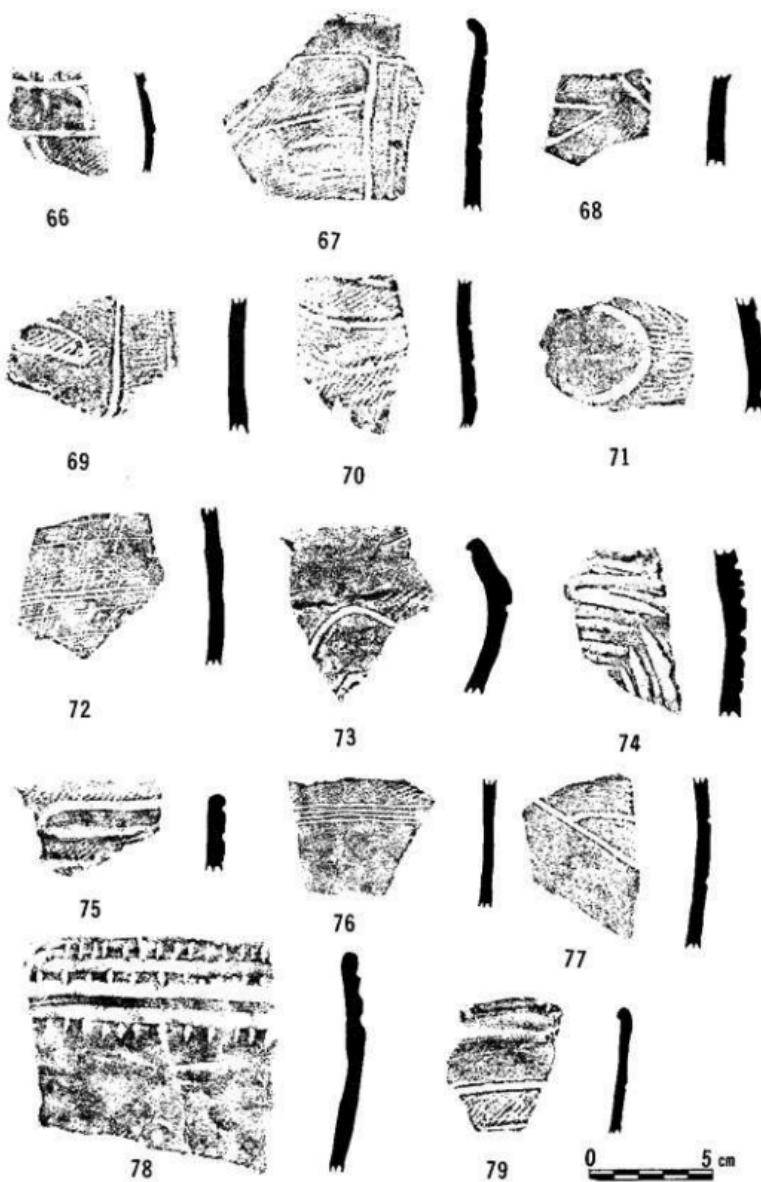
0 5 cm



65

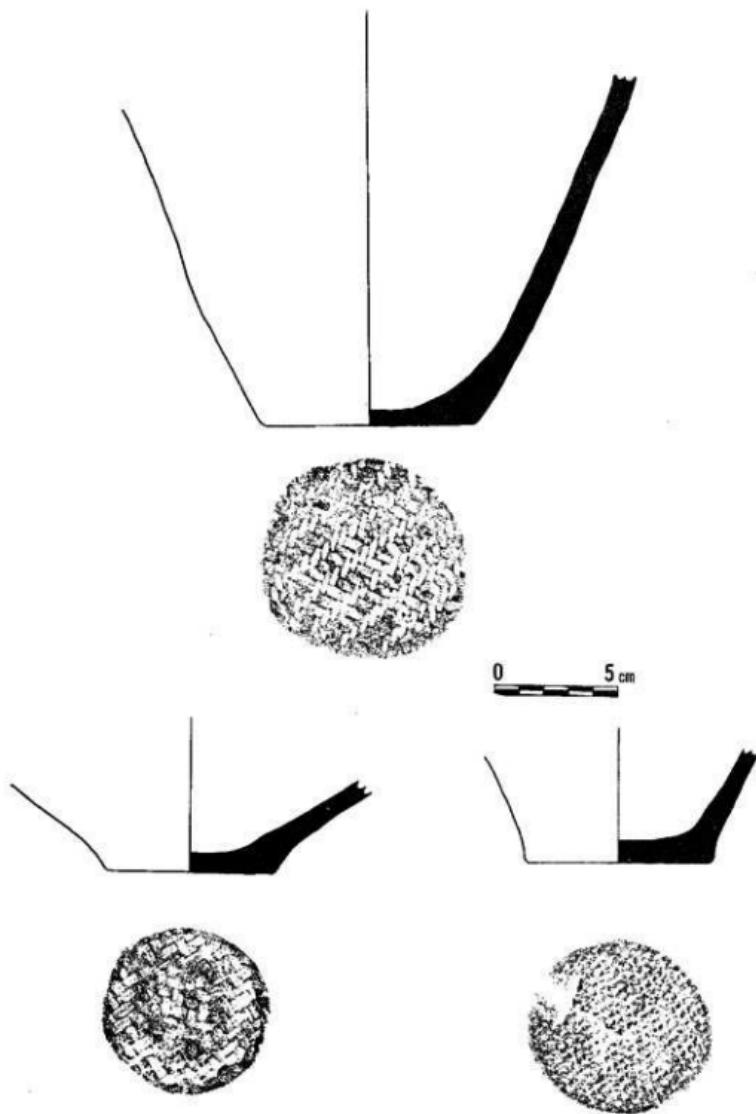
第16図 土器拓影

(第7類)



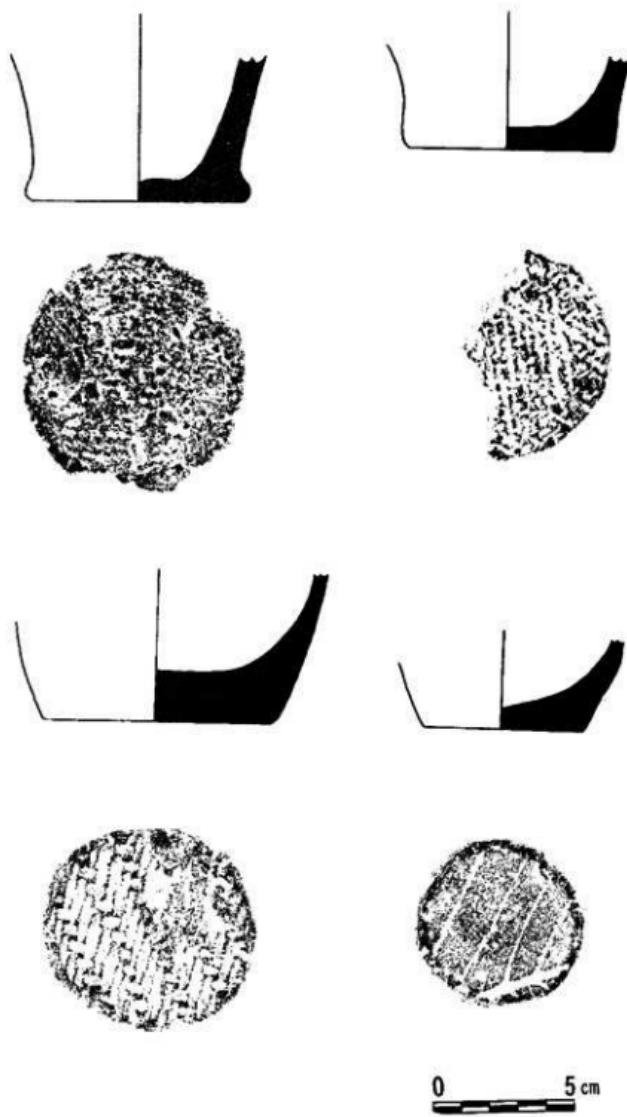
第17図 土器拓影

(第8類)



第18図 土器拓影

(底 部)

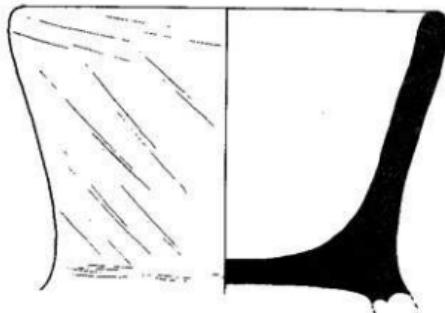
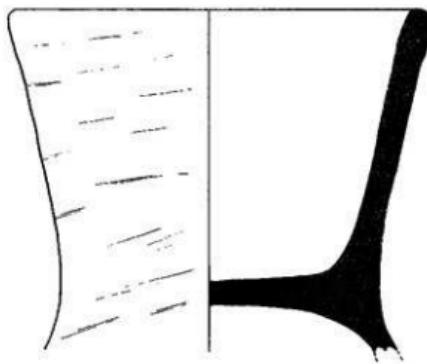
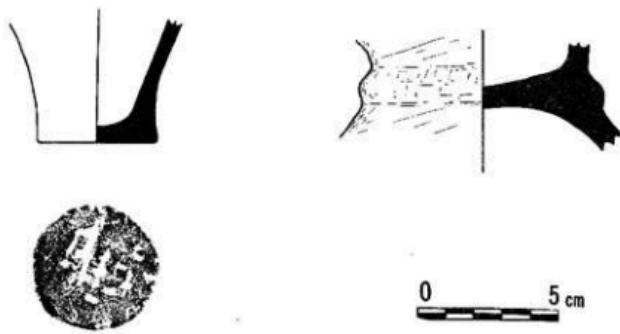


第19図 土器拓影

(底 部)

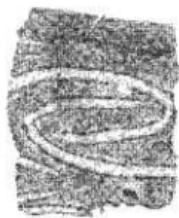
-48-

0 5 cm

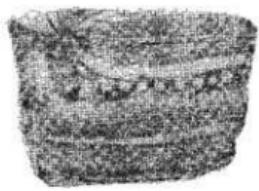


第20図 土器実測図

(台付土器)



0 3 cm



第21図 土偶Ⅱ周辺出土の土器拓影

第 2 節 土 製 品

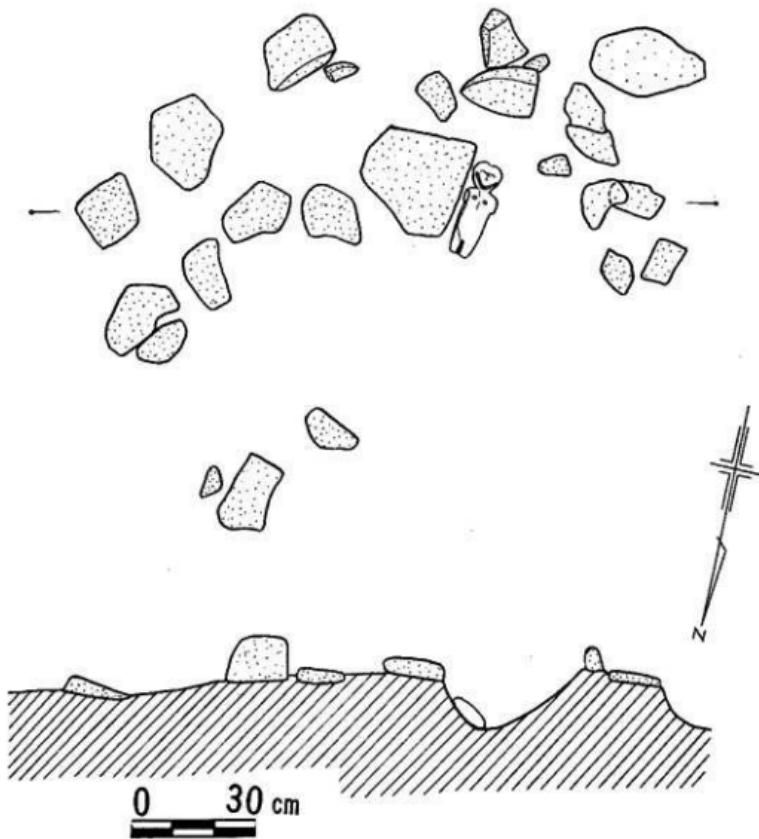
土偶

中谷遺跡から出土した土偶は、全部で8点あり、完型1・頭部片2・腹部1・脚部4である。完型土偶は、高さ23cm巾12cmのもので、両腕が欠けていた。これは最初から故意に欠かれていたものと思われる。出土状況については、第22図にあるように橢円形に並べられた配石の中央部より、頭部を南に顔面を上にし、やや斜めの状態で埋没されていた。顔はハート形を呈しており、口を中心耳の付根までV字形の入墨を粘土の隆起で表現しており、眉や目なども付いていたと思われるが、残念ながらその破片は発見できなかった。脚部を除いた全身に朱がほどこされており、背面には入墨だと考えられる4つの瘤状突起が横に並んでいる。付近から発見された、周囲に刺突文の文様のある耳栓と同一のものを着装していることは、まことに興味深く日本の紺文人の衣生活の一部をうかがい知ることができる貴重な資料となるであろう。この土偶は文様から安行III a式の土器に併行するものと推定できる。焼成は良く、朱のついていない部分は黄褐色を呈する。

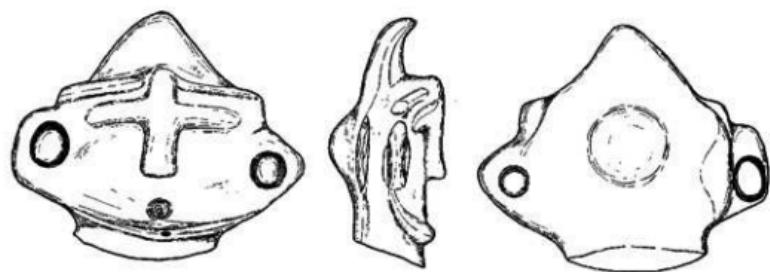
頭部片のものは山形土偶であり、第23図にもあるように土偶の耳部の正面と裏面から粘土をつけており、耳栓の挿入方法を知る良い資料であると思う。焼成は良好で眉部と鼻部が強調されているが、口は小さく目は強調されていない点では前述の完型土偶と似ている。黒褐色を呈する。また耳栓にだけ朱を塗った跡があるのは興味深い。第24図の腹部片は遮光器土偶の物と見られ第24図の頭部片も同じ系統の物と思われ、東北文化の流入が土器だけでなく土偶の上にもうかがえる。

耳栓

耳栓の出土は20点に及び、土偶と同じくほとんど配石造構から出土している。そのうち完型は15点である。耳栓とは耳飾りの一類であり、耳たぶにあけた孔に挿入して着装するもので栓状耳飾りともいう。中谷遺跡のものはボタン状のものやそれに刺突の文様がほどこされたもの、透彫などの美麗な文様のほどこされたものが見られる。耳栓それ自体での時代判別は無理であるが、配石造構からの出土が多いので安行IIIに伴うものと思われる。

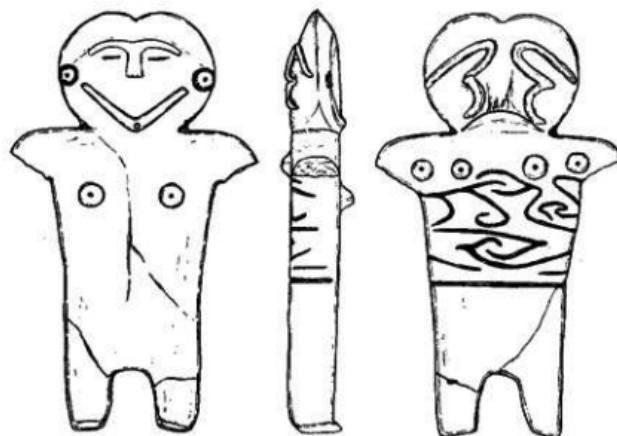


第22図 土偶Ⅱ周辺の配石



0 5 cm

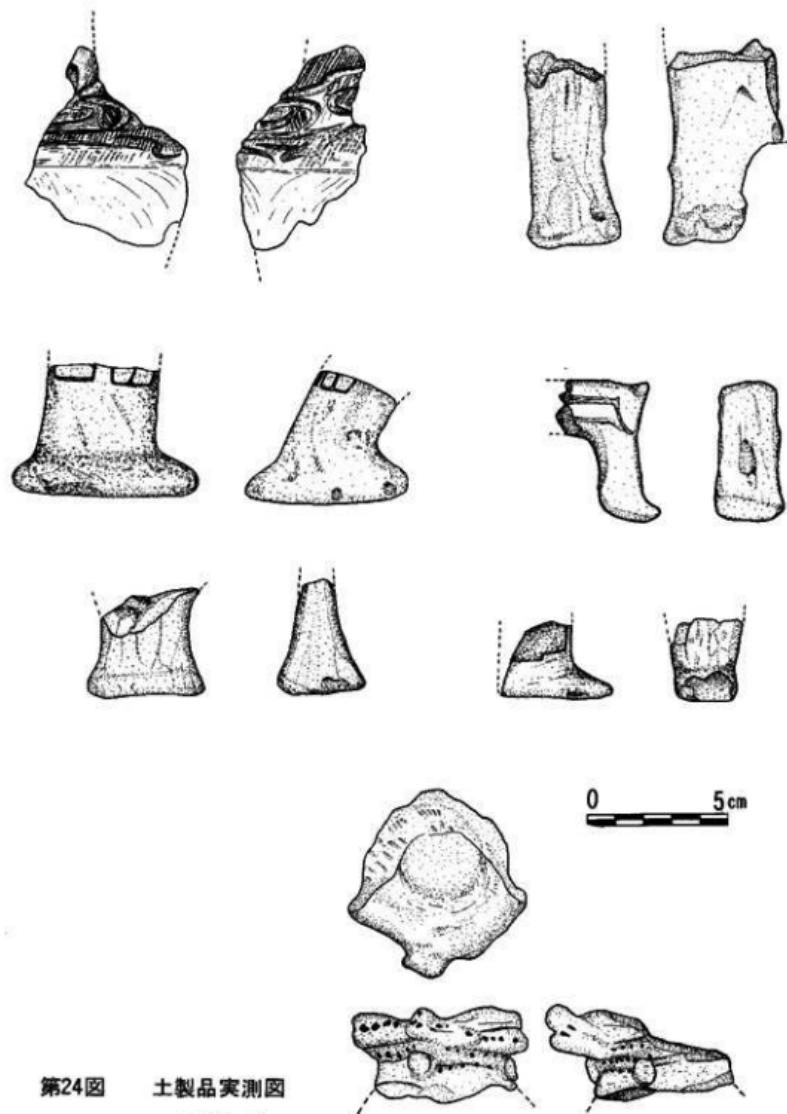
土偶 I



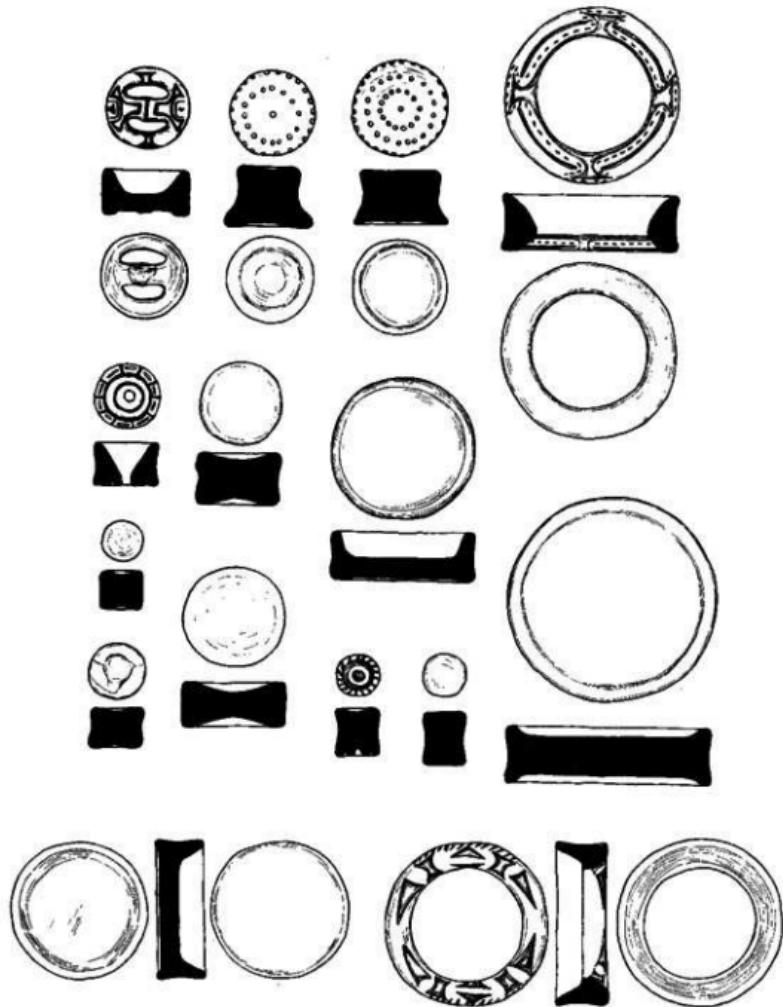
9 cm

土偶 II

第23図 土偶実測図



第24図 土製品実測図
(土偶片)



第25図 土製品実測図
(耳栓)

0 5 cm

第3節 石製品

I 石鎚

中谷遺跡で打製石鎚は、99個発見されており、敷石で4個（第26図4.16.17.18）、住居址で5個（第26図20.22.23.24.25.）、発見された以外みな配石面で発見された。99個のうち、チャート製が11個で、残り全部が黒曜石製である。また、石鎚の形態について述べてみると、有茎が8個のみで、無茎と有茎との比が約9:1となり、有茎の少なさが目立つ。また、配石遺構からの黒曜石の出土がおびただしいことは、石鎚の多量の出土を物語るものである。

II 石錐

石錐は、1点だけ出土しており（第27図31）石質はチャート質で、また、第27図28も石錐かと思われる。

III 石匙

石匙は、2個検出された。いずれも粗製で前者（第27図30）は、石英質であり、後者（第30図100）は、粘板岩である。

IV 磨製石斧

完形のものは、1個（第31図1）だけで、あとは残欠で5個数えられる。總てが、いわゆる定角式である。

V 打製石斧

打製石斧は、完形、残欠合わせて30個数えられる。そのうち、分銅形が5個で、あとはほとんど、撥形である。分銅形は5個のうち、4個（第32図5.7）が頁岩で、残りの1個は泥板岩（第32図6）である。また、撥形は、粘板岩と泥板岩である。

VI 四石

全部で5個発見されている。すべて安山岩を用い、2個（第36図23.27）は、両面に凹みを敲打によって作り出している。

VII 磨石

全部で31個発見されている。ほとんどは硬質砂岩と安山岩であり、極く少数の花崗岩も含まれている。

VIII 石鎌

1例のみ出土した。石質は粘板岩である。両端に著しい打痕があり、いかにも紐をかけるように溝を刻んである。

IX 石刀

先端部と基部を欠損している。石質は、緑泥片岩である。

X 異形石器？

1個出土しており、石質は、砂岩である。

XI 玉類

軽石製（第38図）を除いて、すべてヒスイ製である。有孔の物が3例あり、ヒスイ製のものは、緑色と暗緑色を呈する。ヒスイ製玉の長径は、小さな物から、1cm. 1.5cm. 3.2cmである。

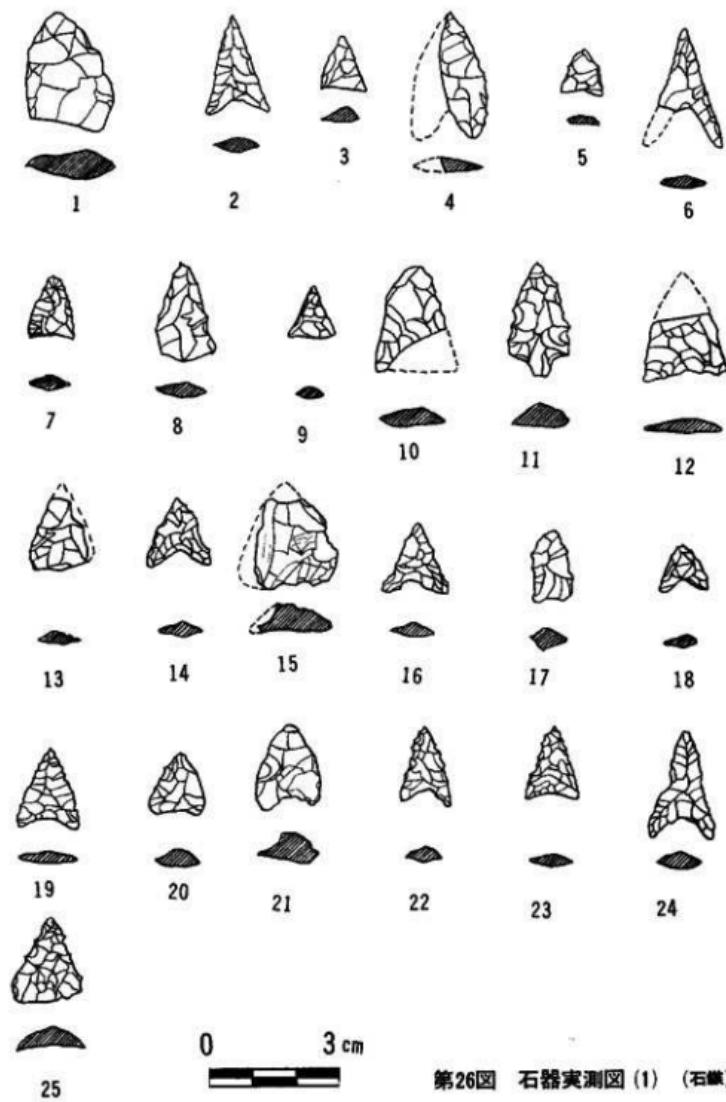
XII 石刀様石器

2個出土しており、砂岩質であり、全面が磨かれており、中央がくぼんでいる。色は黄褐色と黒褐色を呈する。

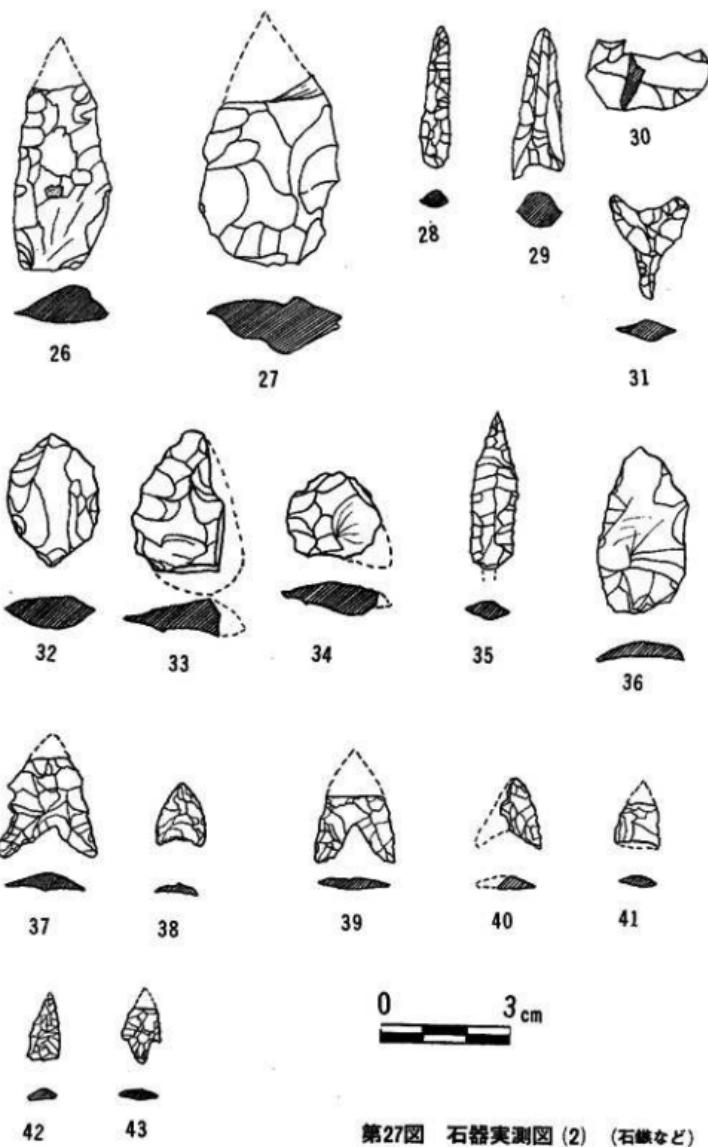
自然遺物

自然遺物としては、配石造構および下層の住居址より出土した多数の獸骨がある。その分布は、遺跡全体におよび、特に焼土中より良好な状態で出土した。出土獸骨の中には、鹿角が存在していたが、人工的な加工の痕跡は、認められなかった。

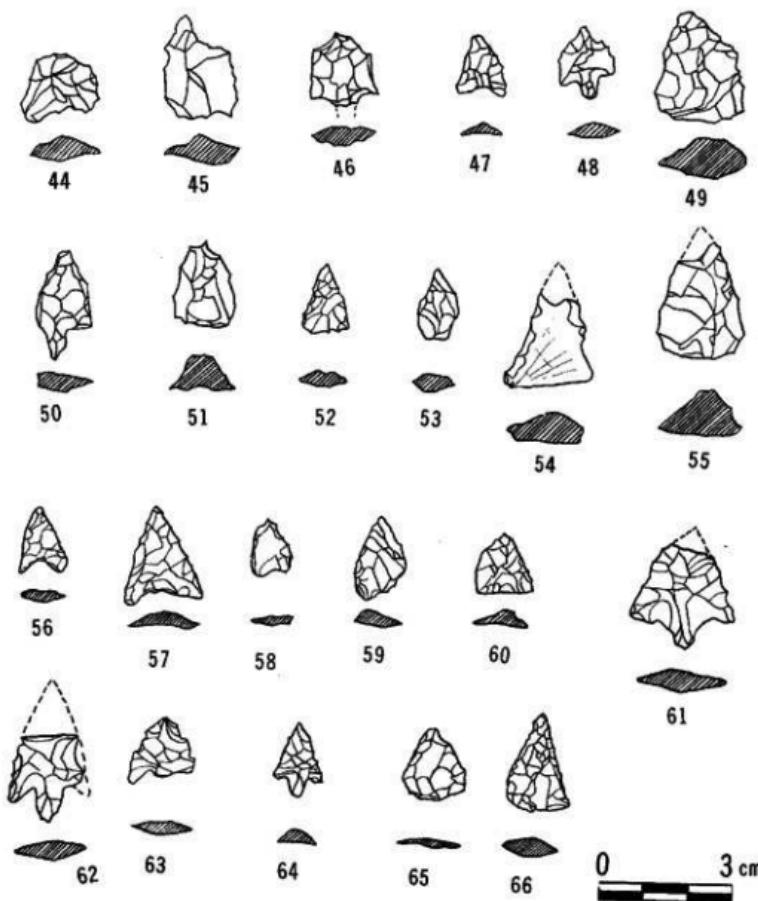
なお、出土した獸骨は、都留文科大学教授・樋原博氏を通じて、国立科学博物館に調査を依頼したところ、すべて熱を加えた痕跡のみられる鹿骨であることが確認された。



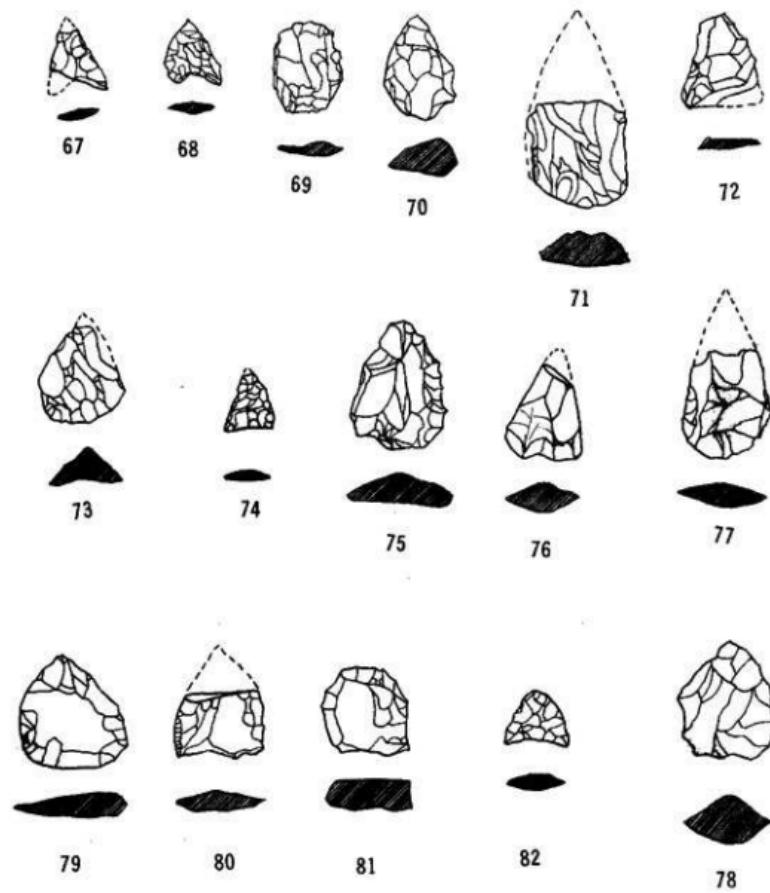
第26図 石器実測図(1) (石鏃)



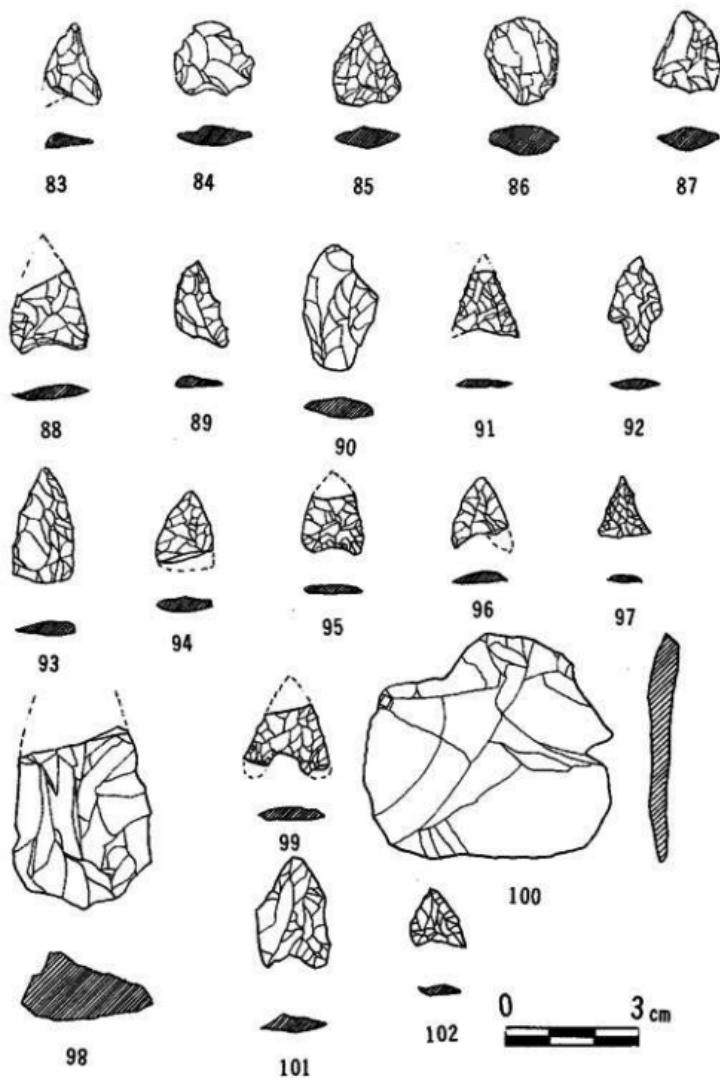
第27図 石器実測図(2) (石核など)



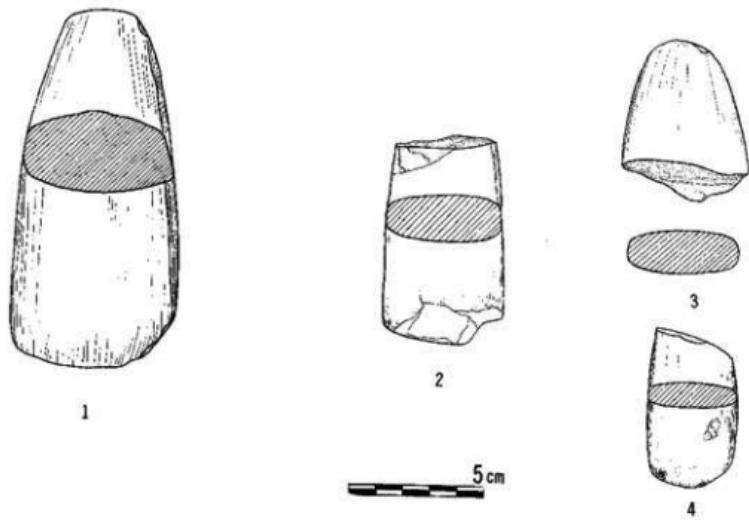
第28図 石器実測図(3) (石鏃)



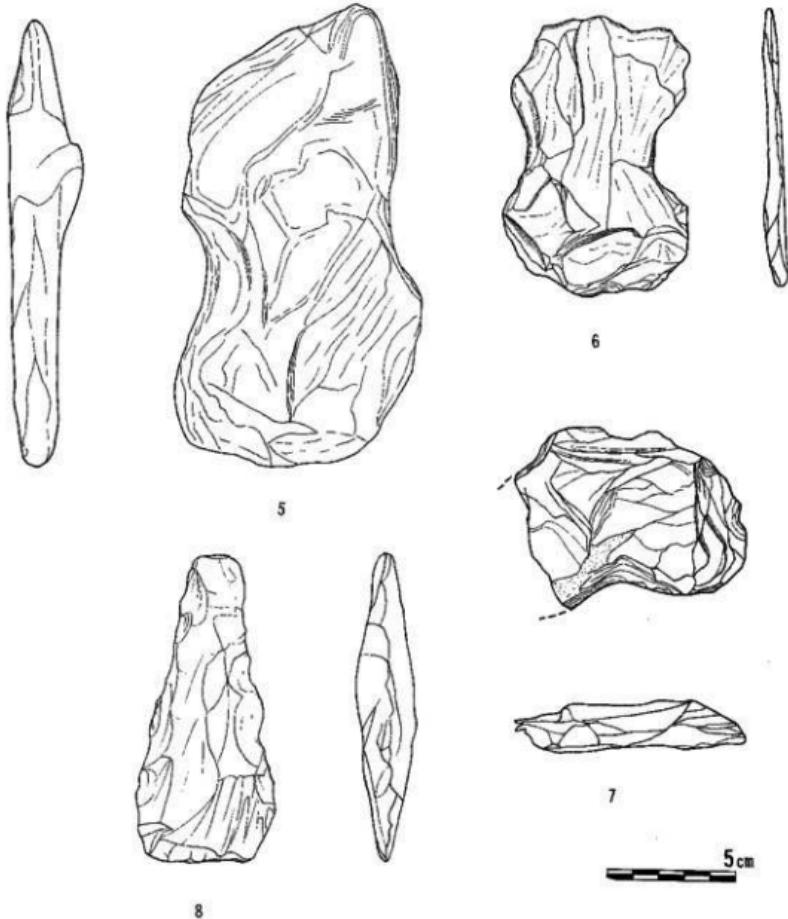
第29図 石器実測図(4) (石核)



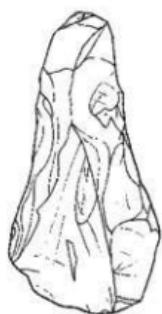
第30図 石器実測図(5) (石核など)



第31図 石器実測図 (磨製石斧)



第32図 石器実測図(1) (打製石斧)



9



10



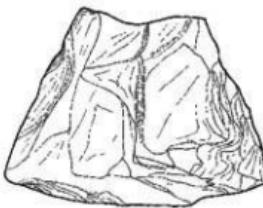
11



12



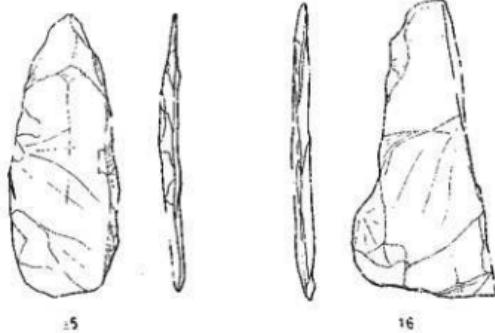
13



14

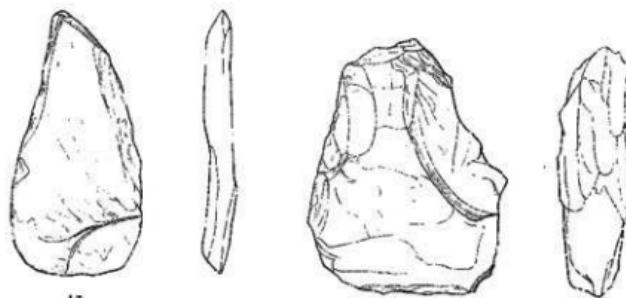
第33図 石器実測図(2) (打製石斧)

5 cm



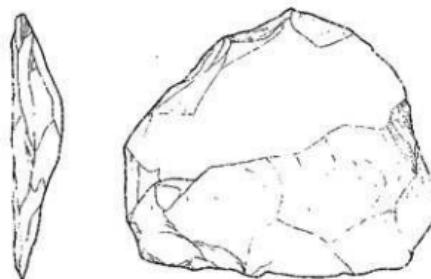
15

16



17

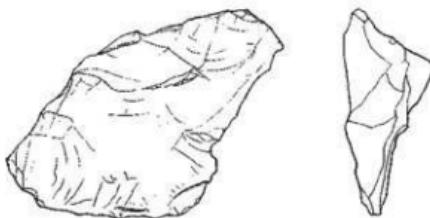
18



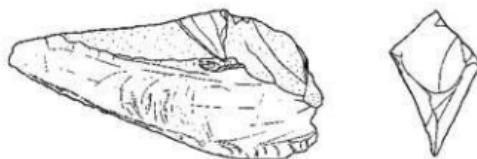
19

5 cm

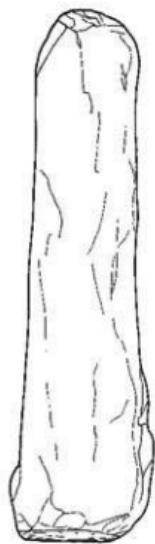
第34図 石器実測図(3) (打製石斧)



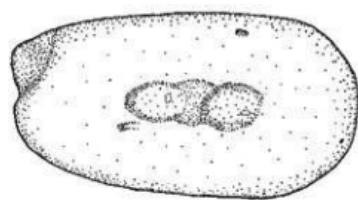
20



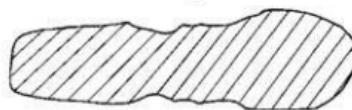
21



22



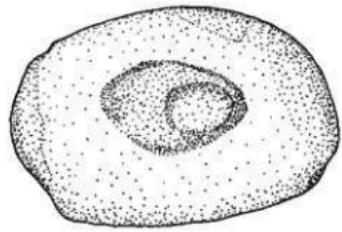
23



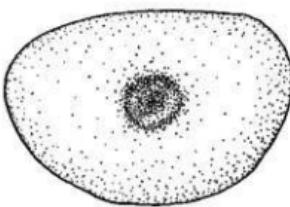
0 5cm

第35図 石器実測図

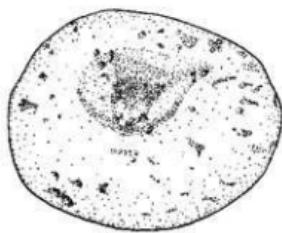
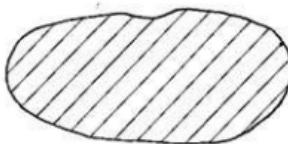
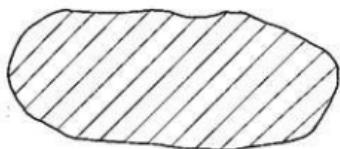
(20, 21は石刀様石器、22 棒状石斧、23 凹石)



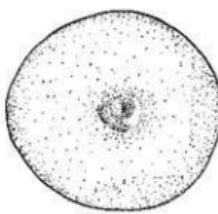
24



25



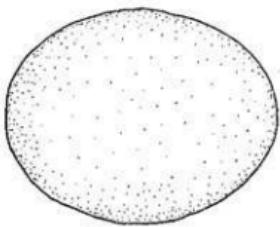
26



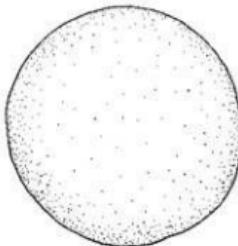
27



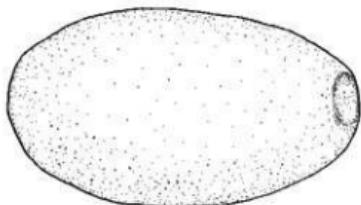
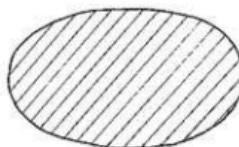
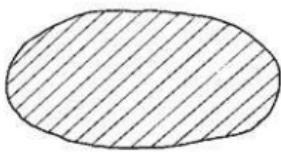
第36図 石器実測図 (凹石)



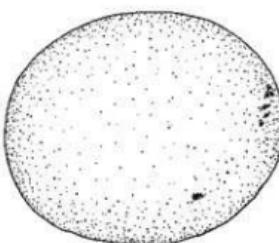
28



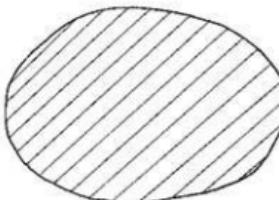
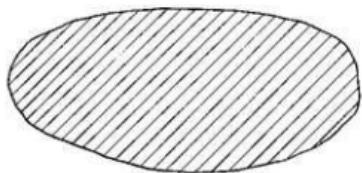
29



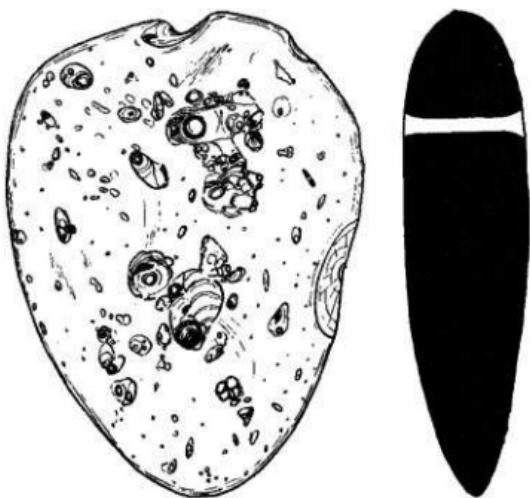
30



31

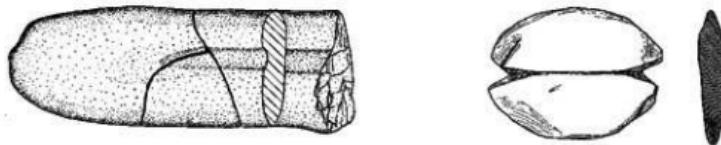
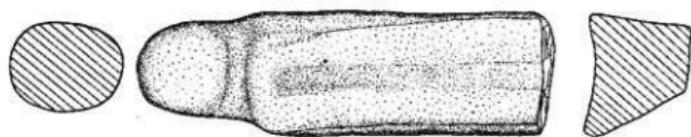
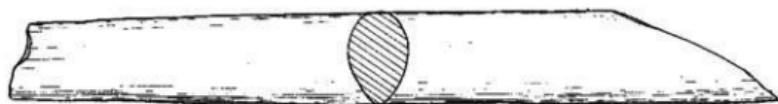

5 cm

第37図 石器実測図 (磨石)



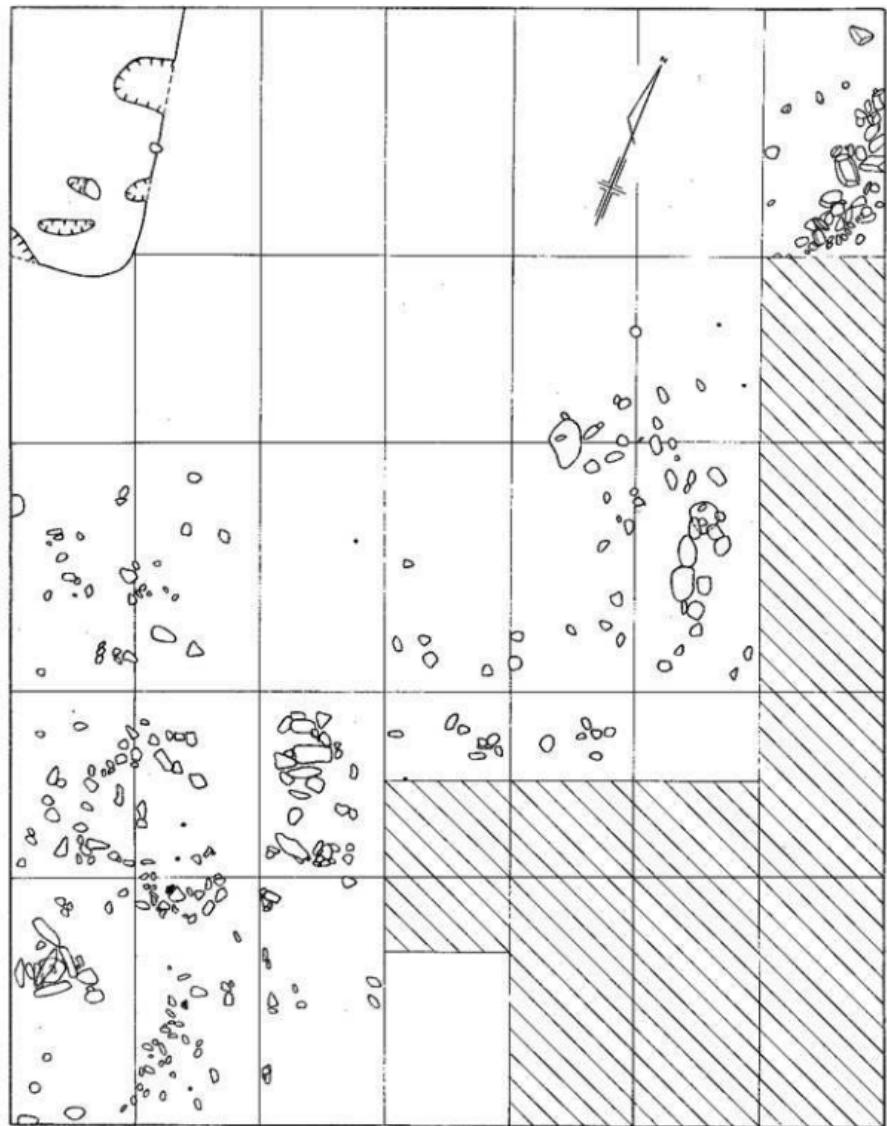
3 cm

第38図 石製品実測図 (玉類) 上、軟石製
下、硬玉製



第39図 石製品実測図

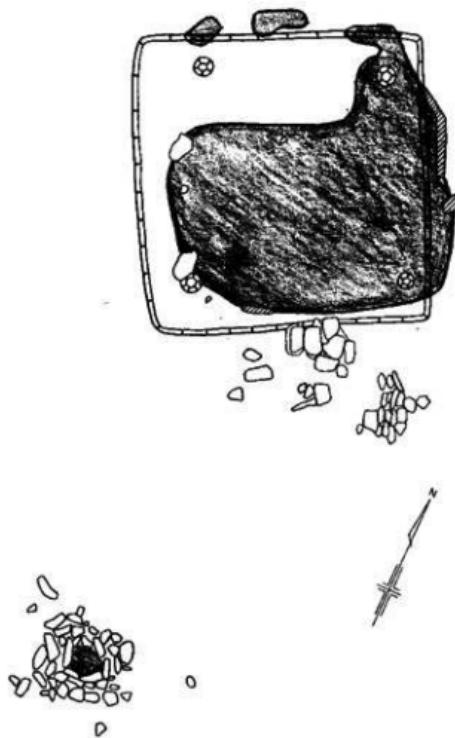
(上:石刀
中:石斧
下:(右)石鎌 (左)石刀様石器)

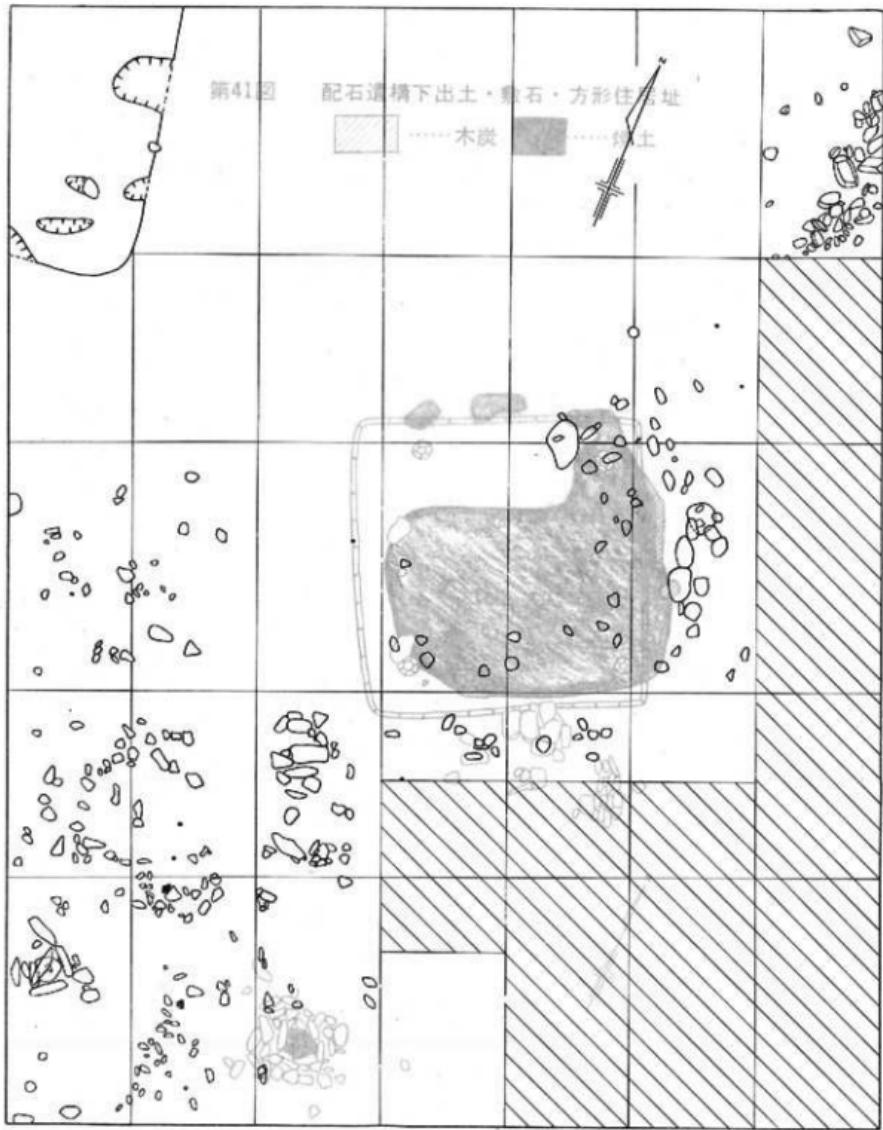


第40図 配石遺構実測図 ● 土偶片出土地点 縮尺 $1/40$ [Hatched area] 未発掘区域

第41図 配石造構下出土・敷石・方形住居址

斜線部分……木炭 黒部分……焼土





第40図 配石遺構実測図 ● 土偶片出土地点 縮尺 $1/40$ ■ 未発掘区域

出土遺物についての 2 ~ 3 の考察

—土偶、石刀、有孔石斧形玉器外—

土偶Ⅰ

組石付近の包含層から無意識に放棄された状態から出土したものである。頭部が三角形であるところから山形土偶と呼ばれているものの中に入れて考えられるもので、鼻の両側に粘土の細い隆起を交わさせ目を表現している。

両耳の位置に隆起を表現しているが、これをよく観察すると、耳栓を施していることがわかる（貫通）

この種の分布は関東地方平野部の加曾利B式土器を出土する地域からの発見がよく知られていて、茨城県利根町の立木貝塚からは、多量に発見されている。

土偶Ⅱ

この土偶は自然石を略々橢円形に配した中から足を北側に頭部は南で顔は西向きの状態で発見されている。顔面がハート形をしている類の中に含められるもので、顔面中目・鼻は強調されずに口元も小さく可愛らしい感じであるが、その反面、両側につけた耳栓 2ヶと鈴と考えられる粘土の隆起線で強調されている。乳房もあるが、目・鼻と同様である。両腕は欠損するが両脚は完存する。背面部には 4ヶのボタン状隙縫を付し刺突されている。文様は入組文をつけているが下部には施文していない。

全体的にみると彼の土偶中の傑作だと称されているハート形土偶 ①（群馬県吾妻町郷原遺跡出土）のそれが、細い胴から誇張した脚部を有し安定感を増しているのに比らべ上半身、特に顔面装飾に重点がおかれていたことに気付く。さて、いれずみについて整理してみると、縄文時代の身体装飾としての、いれずみ（刺青・鱗・文身・入墨）についてはずで明治の後半に ② 大野雲外氏による論文がはじめて以後多くの先学によって論議されてきたところであるが、いれずみ土偶として芹沢長介氏の、③に引用されている。茨城県立木貝塚出土のものや、ひげ土偶としての青森県平貝塚のものが刺突のものであり ④ 江坂輝弥氏の縄文時代中期～晩期の土偶に見られる顔面刺青と思われるもので引用している各種土偶も刺突、あるいは沈線であるのに対して、粘土による隆線で、より強調している点は特異である。

しかもこれ程明瞭に力強く表現していることは、かつて ⑤ 鳥居竜藏博士が報告されている台湾点面蕃女機織の図に見出せる顔面のものや、宮内悦藏氏の報ずる所謂台湾蕃族の身体変工に見られるタイヤル族の文身のものをよく表わしているものと考えてよいだろう。

ここでこそ、わが国 3世紀ごろの風俗を伝えていると思われる晋の陳寿の三

国志の中の、魏書卷30の東夷伝、倭人の条の「男子は大小なく、皆面を鰐にし、身を文にしている」「今倭の水人は沈没を好くして魚蛤を捕え、身を文にし、大魚、水禽を観している」にあわせ見るものがあるだろうし、周辺諸島の風俗についても他の身体変工と共に検討の余地はあるのではないだろうか。

この点すでに⑥江坂輝弥氏も述べているように「わが國周辺の太平洋西部の各地域を見渡すと、刺青の風習のある民族が、各地に散在する。

印度支那の安南山脈の山中で生活するカーチ族、フィリピンのルソン島北部に居住するカリンガ族、イゴロット族、海南島に居住する白沙黎族、僚族、美孚黎族、岐族、台湾に居住するタイヤル族、北海道のアイヌなどに刺青が見られる」としている点であり、今回の土偶がより南島諸島に対して巨視的な視野から考察される分野を示した例になるのであろう。中国の古文献に記された3世紀ごろのわが国の一地方の刺青の風習を伝えた前記の記事が、おそらく3世紀以前の縄文時代からのものであるであろうことは疑いないこととしてよいであろう。今年中国、湖南省長沙市郊外の馬王堆で発見された、初代轪侯の妻とみられる遺体の良好な保存状態を縄文人に期待することは出来ない相談であつてみればこの種の土偶顔面はその好例として受けとめてよいだろう。最後に注意したいものに、背面部に見られる4ヶのボタン状降帯がある。これも特異な例としてあげておきたい。もし予察が許されるとしたら一種の文身としてみたい。背面にある文身の例の報告は稀少であるが、かつて⑦長谷部言人博士の報ずる、マーシャル人の文身中、女子が両肩を超えてその前後にする『矢状帶』を略したものにはならないだろうか。

とにかくこの土偶Ⅱの出現によって今後の論議のかたとしたい

土偶Ⅲ（脚部破片外一括）

土偶Ⅰ及びⅡを除いて殆んどが脚部、胸部等の破片であるが、すべて組石付近の包含層からである。

註

- | | | |
|-------------|-------------------|-----------------|
| ① 大 野 雲 外 | 有耳土偶について | 人類学新誌 27の1 明 44 |
| ② 山 崎 義 男 | 群馬県郷原出土土偶について | 考古学雑誌 39の3 1954 |
| ③ 芹 沢 長 介 | 石器時代の日本 P 144—145 | 1960 |
| ④ 江 坂 輝 弥 | 土 偶 P 305 | |
| ⑤ 鳥 居 竜 蔵 | 江頭嶼土俗調査 | 東京帝国大学 明 35 |
| ⑥ 江 坂 輝 弥 | 前掲書 ③ と同じ | |
| ⑦ 長 谷 部 言 人 | | |

臺灣點面蕃(埔里社方面)女機縫ノ圖(島原清成による)



宮内悦蔵の所謂台湾蕃族の身体変工
人類学 先史学講座十九による

同 (二)



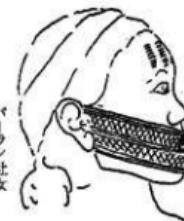
タイヤル族男(角板山社)

同 (一)



タイヤル族女(角板山社)

同 (四)



パーラン社女

同 (五)



タイヤル族女(角板山社)

石刀

摩石刀の破損品である。柄の部分と先端の部分を欠いている。一方の側縁に刀部を模しているため断面はクサビ形である。

全体の形では内反りかどうかは明確にしがたいが、ゆるやかなカーブや内反りのようである。

丹念に磨かれているが切れるというものではなく、施文はないように思われる。石質は緑泥片岩である。

有孔石斧形玉器

出土例の稀れなこの種のものは外来のものと直接結ぶことはさけながらも、例えば中国史前の有孔石斧とその形が似ていて不離な立場に立つて考えてみなければならないであろうことを今更強く思い知るのである。

即ち扁平な磨製石斧の中央や上部に円孔を穿ったものである。硬玉製のものが① 栃木県や外で古くより発見されているが、今回のものは、軽石製である。他の定角石斧玉と同じ類のものとして使用されたとみるべきだが特異な例であろう。不勉強で大陸側の多くの近似例をあげ得ないが、強いてこの扁平な有孔石斧の形を外に求めるものとすれば、中国の長江下流の南京市北陰陽營の遺跡のものがあげられよう。即ち北陰陽營下層（竜山文化BC 1550）同上層（殷BC 1050）と長江下流地域の新石器時代の編年が注目されるところであり、② 南京博物院によるこの南京市北陰陽營の第一、二次的発掘の挿図八による扁平帶孔式石斧にその近似が求められようかと考えるが古く我国でも前述の栃木県の外石川県の③ 珠洲郡山伏山下発見の石斧（須藤求馬氏蔵）が有孔であり上部の片寄つた位置に孔を有するもので、京都帝国大学文学部陳列館考古図録に所収されているのがあげられることも注意しておきたい。

なお、④「樟太の遺物」所収のPL 35 スヤ貝塚出土の短冊形をした有孔石器も山伏山のものと同類ではないだろうか。江坂鷦弥氏が⑤ 所収している硬玉製大珠の中において、従来の分類に従い螺旋型と繊維型の二大別にし、いづれに属さない特殊なものは形を記載し、不整形のものは不整形として扱つた表に、栃木県那須郡湯津上村大字湯津上出土のものを定角式玉斧としてこの範疇に入れており、その後⑥ 日本原始美術の土偶、装身器の中での解説においても「定角磨製石斧状のもので、玉斧とも称すべきもの。」としている点においてである。

⑦ 梅原末治博士が「かえつて闇知されている所謂大珠そのものの再検討、殊に造玉の技術の面での考察」を指摘し、いくつかの例を再検討し「魚形品とみとめられるもの——方形をしたものなどそれである。しかし是等はその形より判じて固より別個な玉器として検討する可きである。特に東京都国分寺の多

喜窪住居址（所謂加曾利E式）で吉田格氏の拾得した長さ10.5cmの長手の破片の如きは復元すると第178図の3のような中膨れのした両刃の短冊形石斧であつて、その上辺に鮮鋭な円孔が穿たれている。」及び他の指摘の中のものを合せて、「中国の史前有孔石斧になろうた、この國土での史前の時代の別な玉製品の一類と言うべきであろう。」と見解をのべられているのであるが、この中谷配石遺構出土の一括玉類もそのような意味の下で理解すべきものではないだろうか。（山本寿々雄）

註

- | | | |
|-----------|--------------------------------|----------------|
| ① 東京国立博物館 | 收藏品目録 P 2 7 | 1956 |
| ② 南京博物院 | 南京市北陰陽營
第一第二次的發掘
(中国科学院) | 考古学報 1
1958 |
| ③ 京都帝国大学 | 文学部隣列館考古図錄
第4図版9 | S 3 |
| ④ 日大文理学部 | 樺太の遺物 | 1966 |
| ⑤ 江坂輝弥 | 所謂硬玉大珠について 銅鑄 1 3号 | 1957 |
| ⑥ 同 | 日本原始美術 2 P 186 | 1964 |
| ⑦ 梅原末治 | 日本古玉器雑誌 P 342~345 | 1971 |

縄文時代の配石遺構

-地名表と文献目録-

作成者 杉山博久

以下に掲げる地名表および文献目録は、1971年8月13日までに収集した範囲内で作成したものである。なお多くの脱説があると思うが、その分については、先学諸兄の御教示を得て、漸次追加してゆきたいと思っている。御教示を願いたい。また、調査者が複数であるような場合は、主としてそのなかの1名の名を記すにとめた。シンポジウムを前に、8月13日に、急速作成したものであるため、印刷等の粗雑なことは御容恕下さるようお願いしたい。

文献目録のうち、「考古」は『考古学雑誌』、『人類』は『人類学雑誌』、『民族』は『民族学雑誌』『ジャーナル』は『考古学ジャーナル』、『年報』は『日本考古学年報』、『発表要旨』は『日本考古学協会研究発表要旨』『北美』は『北米古代文化』『大湯』は『大湯町環状列石』をそれぞれ意味する。

No	遺跡名	所在地	時期	調査年度	調査者	参考文献名
1	朱内	北海道斜里郡斜里町朱内	晩	昭和	河野 広道	
2	地鎮山	〃 小樽市若松町	?	胸	駒井 和愛	駒井『音江』(1959)
3	三笠山	〃 〃 〃				〃 〃 〃
4	音江	深川市音江	後	昭和31	駒井	〃 〃 〃
5	大川	余市郡大川町	晩	〃 33	名取 武光	名取・峰山『大川遺跡』(1961)・『年報』(11)・名取報文
6	西崎山	〃 〃 〃	後	〃 25-27-38	駒井・峰山	『西崎山』(1965)・『年報』(16)・峰山報文・駒井『音江』
7	曾我北条	虻田郡狩太町曾我	〃	〃 26	駒井	駒井『音江』
8	淹台	〃 上淹台	?	〃 〃		〃 〃
9	ホロケ墳墓	三石郡三石町	後	昭和34	藤本 英夫	『年報』(12)・藤本報文
10	御殿山	静内郡静内町	晩	〃 37	江上 波夫	〃 (15) 〃
11	扇ヶ丘	新潟郡新潟町	後	35-37-38	愛下 淳	『年報』(13・15・16)・齊藤武一・藤本英夫・愛下各報文
12	富仁家	沙渡郡門別町	晩 統編	35	大場 利夫	〃 (13)・堀谷昌康報文・堀谷『門別町トニカ遺跡調査報告』(『日高地方史研究』1961)
13	勝山	青森県弘前市大森	晩	34	村越 薫	『年報』(12-14)・村越報文・『岩木山』(1968)・『岩木山古代遺跡』(1959)・村越『大森勝山遺跡環状列石』(『北美』3号1971)
14	十腰内	〃 十腰内	後	35	今井 富士夫	『岩木山』
15	四ツ石	青森市四ツ石	〃	39	小野 忠明	『年報』(17)・小野報文
16	鰐農5号	〃 ひつ市鰐農5号	〃	45	橋 善光	橋『田名部鰐農5号配石遺跡調査報告』(『北美』3号)
17	山野峠	青森市久保坂	〃	41	江坂 隆介	江坂『青森市久保坂山野峠遺跡』(『ジャーナル』10号・1967)
18	野辺地	上北郡野辺地	〃			『大瀧』
19	梨木平	〃 七戸郡食島	〃	26	松本 信広	〃
20	都平	〃 〃 〃 西野	〃		成田 券治	〃
21	榎木沢	〃 〃 〃 野左衛	〃	27	松本 信広	〃
22	札地	下北郡東通村尻屋	〃	29	江坂	〃 『年報』(7・8)・清水潤三・江坂各報文
23	堀平	〃 川内村	〃	27	江坂	〃 (5)・江坂報文
24	高梨	〃 由名部町	?	〃	中島 金二	〃
25	鰐農12号	〃 〃 〃	後		梨木 淳則子	〃
26	脇野沢	〃 〃 脇野沢村	前	43	橋	
27	吹切沢	〃 東吾野町	早	25	江坂	『年報』(3)・江坂報文
28	小森山(東)	中津軽郡岩木町	晩	34	今井	『岩木山』
29	〃(西)	〃 〃 〃	後	〃	村越	〃 『岩木山古代遺跡』(1959)・『年報』(12)・村越報文
30	薙筋	〃 〃 〃	前	33	〃	〃 〃 〃 (11) 〃
31	天狗平	南津軽郡浪岡町	後	笠井 新也	笠井『陸奥国発見の石器時代の墳墓に就いて』(『考古』9号2号・1918)・『大湯』	

名 遺 跡 名	所 在 地	時 期	調 査 年 度	調 査 者	芸 考 文 稿 名
3.2 ヤブシ長根	青森県西津軽郡森田村	後	昭和27	西 村 正 新 村 越	『年報』(5)・西村報文・西村・桜井清彦『青森県森田村付近の遺跡調査概要』(『古代』10号) 『岩木山』
3.3 大曲 1 号	〃	〃	〃	〃	〃
3.4 〃 3 号	〃	〃	〃	〃	〃
3.5 大平野 且村	〃	〃	〃	田 村 誠 一	〃
2.6 在 家 平	三戸郡田子町閑	後	〃 37	江 版	『年報』(15)・江坂報文
3.7 上 楠 樹	〃	〃	〃	羽賀村	江坂『绳文時代の配石遺構分布図解説』(1970)
3.8 築 石 墓	岩手県下閉伊郡田野畠村	後	〃 27	江 版	『年報』(5)・江坂報文・『大湯』
3.9 石	岩手郡久慈尾村	晚	〃	〃	〃 (5-6)江坂報文・『大湯』・草間俊一『岩手県の組石遺構』(北奥)3号 1971)
4.0 南 滝	二戸郡金田一村	後	〃 33	芹 沢 長 介	『年報』(11)芹沢族面
4.1 汎 内 村	和賀郡汎内村	?	〃 34	駒 井	『(12)貞末・柄井』岩手県沢村内のストーンサークル(『考叢』47卷2号・1961)
4.2 標 山	江刺郡相原村	中~後	〃 26-27	江 版	『(5)江坂報文『大湯』』北上市史』(1968)草間『岩手県の組石遺構』(『北奥』3号・江坂『北上市文化財調査報告』(3-7集・1967-69)他多数
4.3 堀 野	二戸郡福岡町	後	〃 37-38-39	草 間 俊 一	草間『福岡遺跡』(1965)同『岩手県の組石遺構』(『北奥』3号)
4.4 田 星	紫波郡石巻町	〃	〃	〃	〃『岩手県の組石遺構』(『北奥』3号)
4.5 宮 沢 原	胆泽郡胆泽町	中~後	〃 39	〃	〃
4.6 太田オ坂	盛岡市太田	?	〃 38	長谷部 言 人	『年報』(16)・吉田義昭報文
4.7 福浦貝塚	大船渡市	後	〃	長谷部 言 人	長谷部『陸奥国福浦上・山貝塚の環状列石』(『人類』34卷5号・19)
4.8 四 の 内	秋田県北秋田郡鹿角町	〃	〃 33	大和久 製 平	『大湯』
4.9 石 倉 岩	〃	〃	〃	奈 良・豊島『秋田県の考古学』(1967)	『年報』(11)・大和久報文
5.0 矢 石 猫	〃	早国町	晚	奥 山 清	〃
5.1 玉 内	八幡平村	〃	〃	〃	〃 (6)・武藤鉄城報文・奥山『繩文晩期の明石館』(『考叢』40卷2号 1954)
5.2 麻 喀 内	比内町	後	〃	〃	同『秋田県北鹿地方の繩文期配石墳墓』(北奥3号)
5.3 上 盛	〃	阿仁町	〃	豊 島 昂	部義平『配石館の成立』(『考叢』54卷1号 1968)
5.4 大 萩	〃	田代町	〃	〃	同秋田県の考古学』
5.5 宝 竜 台	雄勝郡高川町	中	〃 29	武 藤 欽 城	武藤『宝竜台石器時代遺跡発掘報告』
5.6 小 挿	〃	羽後町	〃 38	豊 島	〃
5.7 長 戸 吕	〃	中	〃	武 藤	〃『大湯』
5.8 白 泽	皆瀬町	〃	〃	〃	〃
5.9 杉 泽	鹿角郡小坂町	後	〃 41	奥 山	『年報』(19)・安保彰報文・奥山『小坂郡状列石墳墓』(1969)
6.0 大 澄	〃	十和田町	〃 27	齊 藤 忠	〃 (5)・齊藤報文・『大湯』・『秋田県の考古学』
6.1 黒 草 山	〃	〃	〃	奥 山	奥山『黒森山縄文期堅穴群』(1971)
6.2 根 羽 子 泽	平鹿郡雄物川町	中	〃 30	豊 島	『秋田県の考古学』
6.3 大 泽	〃	〃	〃	〃	『年報』(8)・豊島報文
6.4 袖 野	仙北郡西木村	中~後	〃 26	武 藤	『秋田県の考古学』武藤『袖野石器時代組石群発掘報告』(1952)・『大湯』・武藤『八津櫛状石 塔群』(『考叢』37卷4号 19)
6.5 笠 倉	〃	神岡町	〃 28-29	〃	『秋田県の考古学』
6.6 黒 橋 野	〃	神代村	〃 27	〃	〃
6.7 霧 橋 野	〃	千野村	中	〃	〃
6.8 萩 ノ 台	〃	角館町	〃	〃	〃
6.9 落 合	〃	神岡町	晚	豊 島	〃

No	遺跡名	所在地	時期	調査年度	調査者	参考文献
70	前 杉	秋田県由利郡矢町		昭和27	武 康	『秋田県の考古学』
71	下	〃 〃 〃	後	〃 31	豊 島	〃
72	五 十 丁	秋田市	晩	〃 30	奈 良 修 介	〃 『年報』(8)・豊島報文
73	鳴 滝	大船地区内	後			奥山『秋田県北麓地方の縄文期醒石墳墓』(『北奥』3号)
74	數 森	〃 〃 佃田	前			〃
75	施 泽 II	〃 〃 〃	〃			〃
76	福 館	〃 〃 福館	〃			〃
77	沼 津	宮城県	後		伊 東 信 雄	『日本の考古学』(2)
78	台 田	〃	〃		齊 藤 良 治	『宮城県の地理と歴史』
79	二 屋 敷	刈田郡蔵王町	中～後	〃 45		『ジャーナル』(43号・1970)
80	三 貫 地	福島県相馬郡小川村	晩	〃 27		江坂『考古学ノート・先史時代II』(1957)
81	石 神	〃				『大溝』
82	長 郡	田 〃				『福島県史』
83	佐 貢	栃木県塙谷郡船生村	中	〃 27	江 板	『年報』(5)・江坂報文・『大溝』
84	堂 原	〃 〃 氏町	中～後	〃 28	〃	〃 (6) 〃
85	勝 山	〃 〃 〃	晩	〃 44	塙 静 夫	塙『栃木県氏家町勝山遺跡の調査』(『研究発表要旨1969』)
86	赤 羽	郡都郡須須町	〃	〃 31	辰 己 四 郎	『年報』(9)・辰己報文・宇大歴研『赤羽遺跡調査報告』
87	西 ツ 原	〃 〃 〃	〃	〃 29	〃	〃 (7) 〃 ・渡辺理瑠『栃木県都須須町西ツ原晚期绳文式遺跡』(『研究発表要旨1955』)宇大歴土史研究班『西ツ原遺跡発掘調査報告』
88	竹 下	宇都宮市	後	〃 28	〃	『年報』(6)辰己報文・塙『栃木県清原村竹下遺跡調査報紙』(『下野史学』4号)宇大歴研『栃木県清原村竹下遺跡調査報告書』
89	板 倉 町	足利市板倉町		〃 34	瀬 口 宏	『年報』(12)・川島報文
90	真 一	大田原市平林	後	〃 39・40	渡 辺	〃 (8・18)・渡辺・辰己各報文・辰己『真一遺跡発掘調査報紙』
91	大 門	群馬県桐生市美郷町黒川	中	〃 36・38	西 田 芳 雄	〃 (14・16)・鶴田報文・斎藤『桐生市大門遺跡調査報告』
92	4 綱 谷 戸	〃 川内町	晩	〃 38・40	尾 崎 喜左雄	〃 (16・18・19)・喜左雄報文
93	袖 ケ 原	多野郡中里村	後	〃 39	尾 崎	〃 (17)・尾崎報文
94	板 ケ 丘	埼玉県深谷市		〃 30	小 沢 国 平	〃 (8)・小沢報文
95	平 松 台	〃 比企郡小川町	前～中	〃 42	金井塙 良 一	金井塙『平松台遺跡』(1969)
96	大 石 山	東京都利島			後 藤 守 一	『年報』(11)・戸沢充則報文・『伊豆諸島総合文化財調査報告』(2分冊)
97	田 端	町田市	後	〃 43	浅 川 利 一	浅川『田端遺跡調査報紙』(1969)
98	桜 ケ 丘	南多摩郡多摩町	〃	〃 35	吉 田 格	吉田『多摩村造光寺ゴルフ場内遺跡』(『東京都文化財調査報告書』10冊・1961年)
99	下 布 田	調布市下布田	晩	〃 43	川 崎 義 雄	川崎『調布市下布田遺跡の特殊遺構』(『ジャーナル』34号・196)
100	大 草	世田谷区大蔵町	中	〃 34	桜 井 清 智	桜井『新修世田谷区史』付編(1962)
101	恋 ガ 寺	国分寺市恋ヶ窪	〃	〃 39	甲 野 勇	松井新一『国分寺恋ヶ窪遺跡発掘調査要』(『多摩考古』7・1965)
102	駒 木 野	青梅市駒木野	後	〃 37	〃	甲野『青梅市駒木野石器時代遺跡調査要』(『多摩考古』6・1964)
103	緑 荷 山	町田市高ヶ坂			後 藤	浅川『高ヶ坂石器時代遺跡復旧報告』(『多摩考古』8・1968)
104	馬 8 B	B	中	〃	瀬 口 博	『多摩ニユータク』(瀬口)『遺跡調査報告』(V・1968)
105	馬 場	神奈川県足柄上郡足柄町狩野	後	〃 40～46	杉 山 博 久	『年報』(19)杉山報文・『馬場遺跡の縄文時代配石遺構』(1969)
106	野 野 久 保	〃 〃 〃	〃 中	〃 33	坂 評 秀 一	坂評『神奈川県野野配石遺跡』(『立正大学文学部論叢』15)(1962)
107	金 子 台	〃 大井町	後	〃	神 沢 明 一	『年報』(15・16)赤星・神沢各報文・神沢『金子台遺跡の縄文時代墓地』(1966)
108	中 の 下	〃 〃 〃	中	〃 40		

施遺跡名	所在地	時期	調査年度	調査者	参考文献
109 堀田沢	神奈川県小田原市萩原	中	昭和43		
110 平沢同明	〃 藤野市平沢	後	〃 40~43	桜井	『年報』(19)・杉山報文
111 寺山	〃 夕寺山	タ	〃 10~39	八幡一郎・直良信夫	八幡『横須賀国中寺山の歌石遺跡』(『人別』50卷12号)
112 上吉沢	〃 平塚市	タ	〃 35	江坂	『年報』(13)・江坂報文・紅坂『平塚市上吉沢歌石遺跡調査』(『平塚市文化財調査報告書』5号)
113 東宿大内	〃 北金日	タ	〃 45	高山純	
114 下谷戸	伊勢原市三の宮	タ	〃 40~42	小出義治	小出『經文後期の石油遺跡群』(『ジャーナル』7号・1967)・同『神奈川県三の宮配石遺跡』(『北奥』3号)
115 八幡台	〃 東大竹	タ	〃 8	赤星直忠	赤星『神奈川県伊勢原八幡台住居址』(『考古学』9卷3号・1938)
116 横現台	川崎市	タ	〃 33	久保	『年報』久保報文
117 見高	静岡県賀茂郡河津町	大正14	大場哲雄	大場『南豆見高石器時代住居址の研究』(『考古学研究』1・1927)	
118 赤坂	伊東市岡	中	昭和31	大場哲雄	『伊東市史』(1958・62)
119 シンジ山	〃 吉田	タ	〃 32		"
120 宮前	熱海市初島	タ	〃 40	大場	『熱海市史』(1967)・『年報』(18)・小野報文
121 蔽ノ内	〃 下多賀	前	〃	長田実	" " "
122 奥山	三島市台崎	中後	〃 29		長田報文
123 千枚原	〃 一町田	中	〃 23		『三島市誌』(1958)
124 釜の口	横須賀市中川根町	晩	〃 36	向坂綱二	"
125 桑原	庵原郡桑原町	タ	〃 40	稻垣甲子郎	『年報』(14)・原川宏報文
126 中絲	駿東郡長泉町	中~後	〃 44	佐藤氏雄	" (18) 稲津報文・『桑原』(1966)・他
127 千居	富士市大石原	中	〃 45~46	小野慎一	『中絲遺跡調査略案』
128 入谷平	田方郡修善寺町	後	〃 43~44		小野『駿府縣大石ヶ原千居遺跡の発掘調査』(『ジャーナル』48号・1970)・『大石ヶ原千居遺跡』(1970)
129 小形山	山梨県郡留市	晩	〃 39	坂詣	小野『田方郡修善寺町入谷平遺跡緊急調査報告』(『静岡県文化財調査報告書』8・1969)
130 池の原	南都留郡道志村	タ	〃 28	山本秀之雄	山本『山梨縣の考古学』
					山本『甲斐斐の原遺跡調査概報』(『平妻考古資料集』)・『年報』(6)・山本報文・同『石油遺跡の新例』
					(『富士國立公園博物館研究報告』4)
131 平須	南巨摩郡中富町	中	〃 44		山本『平須石造遺構の調査』(1970)
132 上条	北巨摩郡長坂町	晩		大山柏	大山『山梨県日野村長坂上条発掘調査報告』(『自然学誌』)
133 尾崎原	都留市盛里	タ			『山梨の考古学』・『石造遺構の新例』(『富士國立公園博物館研究報告』3)
134 法能	〃 法能	後			日本考古学年報
135 大塚	西八代郡三枝町	タ			史前学報誌
136 藤内	長野県諏訪郡富士見町	中	〃 37	宮坂英式	『井戸尻』(1965)
137 居平	〃	タ	〃 38	藤森栄一	『年報』(16・17)・武藤雄六・小林公明各報文
138 向原	〃	中			"
139 坪平	〃	後	大正11	鳥居竜藏	"
140 中道尾根	〃	タ	昭和39		"
141 茅野和田	茅野市	タ	〃 44	宮坂	『茅野和田遺跡緊急調査報告書』
142 横畠烟	〃	早	〃		『横畠遺跡』(1971)
143 月見松	伊那市	中	〃 43	藤沢宗平	『月見松遺跡緊急調査報告書』(1968)
144 野口	〃 手良	晚	〃 30	林茂樹	林『上伊那の考古学的調査』(19)・同『野口墳墓遺跡調査概況』(『伊那路』6卷10号)
145 有明山社	北安曇郡松川村	前	〃 42	藤沢	『有明山社』
146 茂沢南石堂	北佐久郡軽井沢町	後	〃 36	三上次男	『年報』(14・19)・三上次男・『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』(1968)
147 佐野	下高井郡山ノ内町	晩	〃 33~34	永峯光一	『佐野』(1967)

番	遺跡名	所在地	時期	調査年度	調査者	参考文献
148	洞	長野県東筑摩郡山形村				『唐沢・洞』
149	二ツ塚	〃 松本市宮瀬	後	昭和39	藤沢	『年報』(17)・藤沢報文
150	池尻	〃 岐城市桑原			木山一政	〃 (16)・木山報文
151	平出	〃 塩尻市				『平出』
152	大明神	〃 西筑摩郡大桑村	晩	〃 37	鰐口昇一	『年報』(15)・鰐口報文
153	藤助畑	〃 駒ヶ根市	中	〃 45	友野良一	『藤助畑・春日』(1971)
154	巾田	〃 境川郡戸倉町	々	〃 38	木山	『年報』(16・17)・森島總報文・同『長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡』(『信濃』18巻6号・19巻3号) 金子浩昌『長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告』(『長野県考古学会誌』2)
155	上原	〃 北安曇郡平村	前	〃 26	大場	『年報』(16・17)・森島總報文・同『長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡』(『信濃』18巻6号・19巻3号) 上原『大場』(『長野県北安曇郡平村上原遺跡調査報告』)(『長野県考古学会誌』2)
156	関沢	新潟県 北蒲原郡中条町	後	〃 32	小出	『年報』(10)・小出報文
157	長者ヶ平	〃 佐渡郡小木町	前～中	〃 40	本間嘉晴	〃 (19)・計良勝範報文
158	大麻	〃 五条市	中	〃 35	上原甲子郎	〃 (13)・上原報文・『大麻遺跡』(1963)
159	蘿生	〃 中頭城郡妙高村	後～晩	〃 "	岡本勇	〃 "・岡本報文・『蘿生遺跡』(1967) 〃 (14)・小片保根文・『室谷洞窟』
160	室谷洞窟	〃	前			中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』
161	中子	〃 中魚沼郡川西町	後	〃 34	藤田良策	『板倉』
162	金沢東	〃 斎尾市金沢	々	〃 33		『年報』(7)・笠原報文
163	御番屋敷	岐阜県吉城郡古川町	々		笠原鳥丸	『音江』
164	東垣内	〃 益田郡小坂町		〃 27	駒井	『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1965)
165	中野	〃			船崎彰一	小江慶雄『滋賀県東浅井郡下草野村』(『文化史学』5)・『大場』
166	麗湖	滋賀県東浅井郡下草野村	中		小江慶雄	前田『八木川流域の縄文遺跡調査報告』(1971)
167	別宮家野	兵庫県養父郡宍粟町	早	〃 44	前田豊邦	『高砂市文化財調査報告』(1)
168	日笠山	〃 高砂市				『大分県考古学』(1971)・前田『大分県大恩寺縄文古墳』(『日本の洞穴遺跡』)
169	種荷洞穴	大分県大野郡朝地町	前	〃 36・37	賀川光夫	
170	タヌキ洞穴	〃 竹田市	中			『年報』(19)・賀川報文
171	大野原	長崎県北松浦郡都町町	晩	〃 40	小田富士雄	〃 (10)・河口報文
172	大平	宮崎県串間市	前	〃 32	河口貞徳	〃 (16)・鈴木報文『宮崎県田野町青木遺跡の発掘』(『郷土研究』1)
173	青木	〃 宮崎郡田野町	後	〃 38	鈴木重治	〃 (14)・池木報文
174	江内貝塚	鹿児島県出水郡高尾町	中	〃 36	池木寛治	〃 (17)・河口報文
175	片野洞穴	〃 鹿児島郡志布志町	前	〃 39	河口貞徳	〃 (19)・
176	石塚	〃 姶良郡溝辺町	前	〃 40	〃	

山梨県内出土の土偶（地名表）

中谷治宇二郎氏の日本先史学序史所収の、秦樟丸著蝦夷島奇観の中に「寛政11年春当別村在籍館西五里の神祠の傍より桶二軸掘出す。往古の器と見ゆ。モンベツ地名夷トアリシと云ふ此神体は裝など着したる形なり。フシコタン地名の丘よりも掘出せし事あり。形少しく異りと雖も髪衣服かくの如し。按するに女の像なり。眼口のあたりに点刻するは今の文身。髪を組みて頭上に結びし形なり。」とあり中谷氏もこの地土偶に関する最初の記録であることを伝えているのであるが

今の文身とするあたり明治以前の文献として再評価さるべきであろう。

さて明治以降における土偶の研究史をひとくまでもなく、最近では江坂輝弥氏によって日本原始美術の中にまとめられている。

山梨県内に発見された土偶出土の遺跡については、中谷治宇二郎氏の日本石器時代の土偶研究序説（昭和5）によれば県内では12遺跡が知られている。その後仁科義男氏を指導者として北巨摩郡教育会がおこなった同郡下の当該調査を先史原史時代という単行本にまとめ、さらには昭和8年、山梨県出土の石器時代土偶として考古学雑誌に発表している。

全県下をまとめている点で利用に便である、その後大戦を経て、戦後の資料についても、土偶自体の出土状態を発掘調査を経て処理した例は稀れであり昭和27年北巨摩郡長坂町の上条の石造遺構（配石）調査の例外若干に過ぎなかった。今回的小形山中谷遺跡のような出土例は全国的にも稀有のことであろうし、今後における研究資料としては第一級のものではないだろうか。

これを機会に過去の報告例のある土偶の出土地一覧表をかかげて今後の資料をしたいと思う。し図版等も手がけて集成する日の近いことを希うものである。

山梨県出土の土偶 地名表

発見地名	部位	所蔵者	報告者	備考(文献)
北巨摩郡小瀬沢町	体部	田中善守		仁科義男報文参照
" "	頭部	鳥居竜藏		"
" 笹原高原	脚	小林景登米		山本寿々雄『甲斐石器時代遺跡遺物発見地名表 1927-55』
" 大泉村字西井出	肩胛部	浅川耕三		仁科氏報文参照
" 長坂町字大井森	脛	清水通雄		"
" "	肩胛部	"		"
" "	頸部	"		"
" 字柿木平	体部	清春 小学校		"
" 字大八田	下肢	堀内 常太郎		"
" 字長板上条	脚	山本 寿々雄		"
" 字渋沢	頭部	船窪 久		"
" "	頭部	"		"
" "	上肢	城北 農学校		"
" "	体部	井出 佐重		"
" 高根町字北割	上半身	原嘉明		"
" "	下半身	高見沢 文		"
" 字西割	上半身	藤森義國		"
" 字小池	体部	浅川耕三		"
" 明野村字浅尾原	上半身	船窪 久		"
" "	下半身	志村 滉 藏		"
" "	体部	"		"
" "	下肢	"		"
" "	体部	船窪 久		"
" "	"	朝神 小学校		"
" "	"	船窪 久		"
" "	"	"		"
" "	下肢	志村 滉 藏		"
" "	"	船窪 久		"
" 字上手	上半身	自得院		"
" "	"			明野村誌
" "	"			仁科氏報文参照
" "	"			"
" "	"			"

発見地名	部位	所蔵者 報告者	備考(文献)
北巨摩郡明野村字上手	胴		明野村誌
" " "	脚		仁科氏報文参照
" " "	"		"
蓮崎市	下半身	中田 小学校	"
宇宮久保	上半身	三枝 善衛	"
" "	"	"	"
" "	頭部	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	体部	"	"
" "	頭部	轟坂 小学校	"
" "	体部	"	"
" "	下肢	"	"
" "	"	"	"
" "	上肢	"	"
" "	下肢	三枝 善衛	"
字坂井	下肢	志村 滉 蔵	"
" "	略完	延命寺	"
" "	"	志村 滉 蔵	"
" "	頭部	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	体部	"	"
" "	"	"	"
" "	下肢	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	"	"	"
" "	船座	久	"
" "	体部	"	"

発見地名	部位	所蔵者	報告者	備考(文献)
蘿崎市字鳥之小池	頭部	三枝善衛		仁科氏報文参照
" 字千津峯	"	"		"
" 字大門	下肢	志村清藏		"
北巨摩郡双葉町字中原	略完	延命寺		"
" 穴山村字次第窪	体部	船窪久		"
" " "	頭部	穴山小学校		"
中巨摩郡敷島町字上福沢	体部	三井英夫		"
" " 字清川		仁科義男	仁科義男『宮本村及び清川村先史時代』遺跡発見地名表	
東八代郡中道町	下半身	右左口	中学校	
"	骸骨器			一宮町誌
" 御坂町駒留	上半身	黒駒	中学校	山本寿々雄『甲斐石器時代』遺跡遺物 発見地名表 1927-55
" " 上黒駒	上半身	帝室	博物館	
" "	上半身			谷口一夫『黒駒発見の中期縄文式土器』 富士国立公園博物館研究報告書
" 一宮町国分	頭部			一宮町誌
山梨市立石	8			日下部町誌
" 七日子	9			"
" 字上手原	上半身	東京大学人類學 教室		仁科氏報文参照
" 宮の平	脚			山本寿々雄『甲斐石器時代』遺跡遺物 発見地名表 1927-55
塙山市字岩堂	頭部	内田源藏		仁科氏報文参照
" "	"	"		"
東山梨郡勝沼町	"	三輪常松		"
" " 等々力	体部			勝沼町誌
" " 藤井	頭部			"
" " 岩堂崎	"			"
" " "	"			"
" " "	"			"
北都留郡上野原町字本町	"	上野原 小学校		仁科氏報文参照
" " 原	上半身	西原 中学校		山本寿々雄『甲斐石器時代』遺跡遺物 発見地名表 1927-55
大月市強瀬	脚			"
都留市戸沢	下半身	西念寺		"
" 法能	頭部	杉本明		住吉遺跡発掘報告書(予定)
" 小形山中谷	略完	都留市教育委員会		
	頭部	"		
	腰	"		
	下半身	"		
	腕	"		
	脚	"		
	"	"		
	"	"		

山梨県内出土の耳栓（地名表）

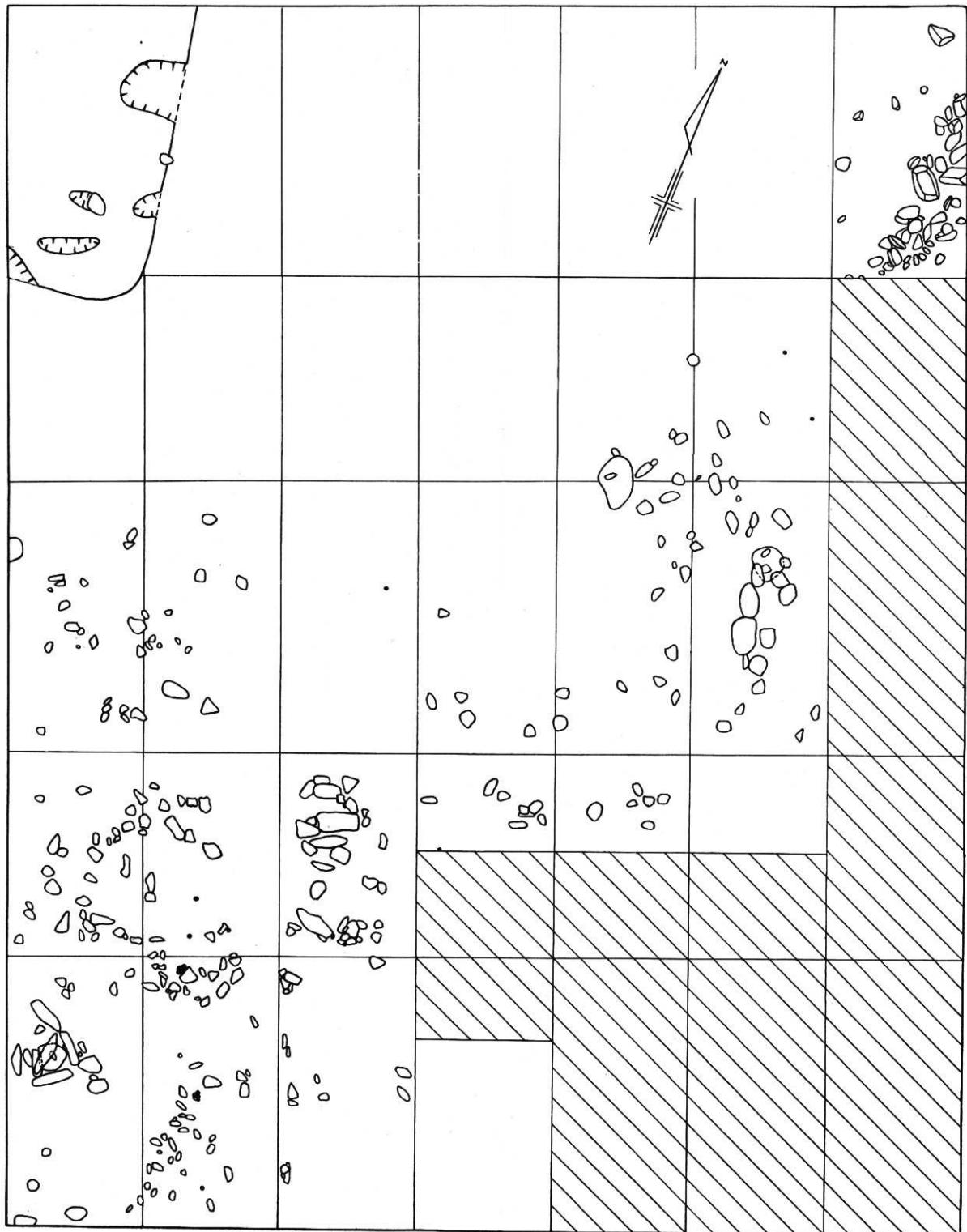
山梨県内出土の耳栓については、昭和7年北巨摩郡教育会編の先史原史時代調査所収の出土地名表がある。しかし偶然の発見例であって、どのような状態の中からのものか明らかにされないうらみがあった。

戦後においては、いくつかの配石遺構の調査のうち昭和28年、南都留郡道志村池の原遺跡のピット内から耳栓1ヶを検出することがあった。その他には町村誌などの単編の中にも耳栓に関するものの記事はあるが、出土についての具体的な背景にはふれていない。

そこで今回の小形山中谷遺跡調査を出発点として耳栓について掘り下げられるデータもあるわけであるので、後の便利のために一応判明出来る範囲で地名表をつくることにした。

発見地名	径	点数	所蔵地	報告書	文獻
1 北巨摩郡長坂町	5.0cm	1	狭北農学校	先史原史時代調査北巨摩教育会	
2 タ	2.4	1	清水通雄		タ
3 タ	3.0	1	タ		タ
4 タ	2.1	1	タ		
5 タ	3.9	1	タ		タ
6 タ	2.6	1	タ		タ
7 蕨崎市	2.9	1	根津保家		タ
8 北巨摩郡小瀬沢町	6.8	1	小瀬沢小学校		タ
9 タ 長坂上条	3.2	1	山本寿々雄		
10 南都留郡道志村池の原	2.9		タ	甲斐池の原遺跡調査・甲斐考古学資料集 9	
11 山梨市七日子		3		日下部町誌	
12 タ 立石		1		タ	
13 タ 小原西		1		タ	
14 都留市久保	4.2	1	都留文科大学 考古学研究会		

発見地名	径	点数	所蔵又は報告書	文 獻
15 都留市久保	3.8cm	1	都留文科大学 考古学研究会	
16 " 法能		破片1		
17 " 小形山中谷	7.2	1	都留市教育委員会	
18 " "	6.2	1	"	
19 " "	6.0	1	"	
20 " "	5.0	1	"	
21 " "	4.3	1	"	
22 " "	4.2	1	"	
23 " "	4.0	1	"	
24 " "	3.8	1	"	
25 " "	3.6	1	"	
26 " "	3.4	1	"	
27 " "	3.0	3	"	
28 " "	2.3	1	"	
29 " "	2.1	1	"	
30 " "	1.6	1	"	
31 " "	1.5	2	"	
32 " "		破片13		
33 " "	2.7	1	都留文科大学 考古学研究会	



第40図 配石遺構実測図

●主偶片出土地点

縮尺 $\frac{1}{20}$



.....未発掘区域

